
【スパイラル・トライアングル】

神無月によ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【スパイラル・トライアングル】

【Nコード】

N6712Z

【作者名】

神無月によ

【あらすじ】

正暦一九九一年。帰るべき世界を失った孤独な少女は、不器用な死霊魔術師^{ネクロマンサー}と出会い――

正暦二〇〇〇年。互いを思いやる可憐な姉妹は、奇妙な白衣の女と、悪趣味な灰色装束の傭兵たちと、横暴なテロ組織に出会い――

正暦二〇〇四年。中性的な容姿の少年は、雨の気配を感じながら、傍らの少女に過去を語った。

※この物語は、【キセキシリーズ】と世界観を共有しております

が、時系列が大幅に異なるので、単体で読んでも問題ありません。
※この物語は現代風異世界ファンタジーです。つまりは、フィクション。実在する人物、団体、事件、その他、一切関係ありません。

Spiral | 3 正暦二〇〇四年 (前書き)

※この物語は、【キセキシリーズ】と世界観を共有しておりますが、時系列が大幅に異なるので、単体で読んでも問題ありません。
※この物語は現代風異世界ファンタジーです。つまりは、フィクション。実在する人物、団体、事件、その他、一切関係ありません。

ここに、雑木林に埋もれるようにして山奥にひっそりと佇む古びた屋敷がある。

下手をすると築何百年は突破しているのではないだろうか、相当な年季が入っている木造だ。

外観は不吉にも黒く、かなり薄気味が悪い。

特に夜になると、空から押し寄せる闇さえも蹂躪されることを恐れ裸足で逃げるかのように、暗闇の中で不思議と圧倒的な存在感で屹立する。

現在、陽射しが傾き始めている昼間の明るさでもってしても、あまり頼りには感じない。

山奥という立地も関係しているのだろう、ほとんどの時間帯に関係なく、人を寄せつけない異空間のきらいがある土地だった。

けれど、それは部外者の感想に過ぎない。

住めば都。

すなわち、この建て壊しが決まっていそうな屋敷の住人たちは、自分たちが住まう世界観になんら疑問を抱いていないのだった。

——そう、数名の住人がいるのである。

幽霊屋敷と呼ばれても違和感どころか至言とも思われる、このオンボロ屋敷には。

とは言え、生活感は皆無だ。

本当に人が住んでいるのかも怪しい。

少なくとも外から見た様子では、誰もいないように見える。

その最たる例が庭のあり様かもしれない。

敷地内には広さだけは立派な庭園があるのだが、ほとんど無法地帯に等しく荒れていて、整備されている様子がないのだ。

家主が自分で手入れすることもなければ、庭師も雇っていないか

らだった。

花壇に剥き出しの土や枯れ木が寂しい。

流れる冷たい風に煽られて枯れ葉が宙を舞っている。

季節は秋から冬へと移ろい始めていた。

——ギシッ、ギシッ、ギシッ

外気の寒さも手伝って、無駄に広い屋敷内の長い長い廊下も、ひどく乾燥している。

歩く度に軋む床の音が、足の裏を底に沈ませていくような錯覚を生んだ。

——ギシッ、ギシッ、ギシッ

廊下に響く乾いた足音が、まるで『この世には永遠などない』と語っているようであった。

どれだけ丁寧な愛情を込めて手入れをしようと、物はいずれ壊れ朽ちていくもの。

この屋敷も相当な長寿のようだが、それでも至るところに限界の兆候が見受けられる。

人の倍近歳月を、この地に根を張って過ごしてきたのだろう。

——ギシッ、ギシッ、ギシッ

二人分、軋む足音が一定のリズムを刻んでいる。

しかし、ふいに片方の音が止まった。

並んで歩いていた、歩幅の狭い足音も数歩進んでから気がついたように停止する。

「ライト君？」

少女は立ち止まり、左半身だけ振り向く形で踵を返した。

その拍子にギシッ、と床が鳴く。

少女の年齢は、まだ一四歳ほどだ。

しかし、小顔の中にしっかりとした顔立ちと知的な双眸、賢そうな雰囲気と引き締めていて、小さくて可愛らしい女性秘書とい

ったイメージをまとっている。

茶色い前髪を左サイドの深めからアシンメトリーにしてヘアピンで留め、後ろはシュシュを使ってアップにしている。

同系色のシャツ地とレースを合わせたベージュのワンピース、ではなく、スーツでも着用していれば本当に秘書に見えただろう。

少女イリヤの視線の先にいるのは、当然ながら社長ではない。

彼女よりも二歳年上の少年だ。

目を引く外見的特徴と言えば、宝石じみた金髪金眼か。

けれど、その輝きは人間の強欲を満たすためだけの浅ましい色ではなく、ただひたすらに超然とした唯一無二の一色である。

シミ一つない色白な肌と、線が細いシャープな体つき、女の子寄りの中性的な顔立ち、ますます彼の金髪金眼の美麗を際立たせていた。

少年の名はライトⅡグランデールナイトパレード。

嵐で崩れ落ちそうなこの屋敷を拠点に、世界中を視野に入れて事業を進めている『事務所』の副所長である。

「どうしたんですか、ライト君」

先程イリヤが問いかけてもライトは無言で、雲の陰りが差し始めている空を窓から覗いていたので、少女はもう一度、声をかけた。

小さいけれど、芯があって透き通ったイリヤの声。

ピアノの伴奏に合わせて語るように歌えば、とても耳心地の良さそうな旋律になりそうなものだ。

そんな感想は心の中に留めながら、ライトは視線を庭園から屋敷の廊下内に戻した。

悲しくて泣いている子供をそっとあやすかのように、柔らかに微笑む。

屋敷の窓から差し込む、おそらく今日最後の陽射しとなるであろう光が、きらきらと少年の繊細な金髪を反射した。

その煌めきがあまりにも綺麗だったものだから、イリヤは一瞬だけ心を奪われた。

その気持ちを悟られるのが恥ずかしくて、彼女は書類を挟んでいるファイルを抱え直す仕種で誤魔化す。

たぶん誤魔化しの効果は生じていないだろうけれど。

と、少年が口を開いた。

廊下の冷え切った空気と、イリヤの聴覚を優しく震わせたのは、温かいテノールだった。

「この世には二種類の人間がいる。分かる？」

ああ、また始まった……、とイリヤの内心には嫌な予感しか生まれなかった。

ライトは彼女の心中を知ってか知らずか、構わず声帯を開く。

「それはね——それは、一二歳以下の幼女（僕の基準）を愛でる紳士と、そうでない変態だ」

「……」

ああ、もうっ、ホントこれさえっ、これさえなければっ！

とイリヤは心の底から残念に思う。

そんな想いが溜息となって少女の唇からこぼれた後、彼女は半眼でライトの清々しそうな表情を睨んだ。

「人間という壮大な括りで、変な定義を作らないで下さい。ハッキリ言ってライト君以外の人間にとっても失礼ですし、思いつ切り男性目線の発言ですし、たぶん変態と紳士の供述が逆です」

しかし、ライトはイリヤの正論に聞く耳を持たず、意味不明な自論を並び立て始めた。

こうなると、彼はなかなか止まらない。

「そして、この世には二種類の女性しかいないんだ。世界の宝である一二歳以下の女の子と、そうでないお年寄りの女性たちだ」

「発言には注意と自己責任を。でないと、この私を含めてこの世の

全ての女性に命を狙われかねませんよ、ハッキリ言って」

「けれどね、考えてもごらんよ、イリヤ君。この世には二種類の僕しかいないんだよ。三次元の少女にしか興味がない紳士な僕と、一歳以上に達してしまった女性たちの救済——つまり、女性たちの年齢の退行化を諦められない紳士な僕だ」

「『けれど』の使い方と、ライト君の頭がおかしいです。要するに、ライト君は自身を単なる変態として扱ってくれと言いたいのですか？」

イリヤは軽蔑の色を込めて見つめ返す。

だが、ライトに堪える様子はない。

彼は他人の評価を気にしない。

だからどこまでも温厚な表情で、静かに唱えるのだ。

彼にその意図はなくても、自身の変態加減を露呈する形で。

「この世には二種類のロリコンがいる。分かるかい？ 幼女を目視しても我慢できる紳士と、色々と我慢できなくなっちゃう変態だよ」
「一応、紳士も我慢しなくてはならない状態にあるんですね。ロリコンである限り、紳士だろうと変態だろうと紙一重なんでしたら、ハッキリ言ってどっちも捕まえれば良いのに」

ほとんど四六時中こんなことばかりのたまっている一六歳の少年に対して、正常な一四歳の少女は変なイキモノでも発見したかのような眼差しを向け、それでも律儀に受け答える。

ロリコンはロリコンでも相手は書類上、彼女の上司にあたるのだから仕方がない。

セクハラで所長などに訴えないのは、物理的に被害を受けているわけではないからだった。

「この世には二種類の犯罪者がいる」

「まだ続くんですか？」

辟易しながら訊ねるけれど、真のロリコンは動じない。

「警察に捕まる大変、変態なロリコンと、捕まらない紳士だ」

「捕まらなければ紳士って……しかも、犯罪者はロリコンばかりみ

たいな言い方しないでください。ハッキリ言ってライト君ほど特殊なのは、そうそういませんから」

この際『たぶん』とは付け加えない。

ごめんなさい。

「いや、そうでもないよ。この世には二種類の人間がいるんだ。小等部の教師になれる勝ち組紳士と、なれない負け組変態だ。プールの時間タダ見とか……ッ」

「いやいや、前後の台詞に関係性を見出すとしたらテーマが『一二歳以下の女の子は最高』という逮捕的な部分だけで、『いや、そうでもないよ』という否定を挟む必要性はありませんでしたし、小等部の教師になることだけが人生ではありませんから、涙流しながら悔しそうに言わないでください。それに小等部の教師になる動機が不純すぎて紳士と呼ぶのには、勇気がいります」

「ううう」

「もう、そんなんじゃ結婚どころか彼女もできませんよ？ ハッキリ言って」

「うん、このままじゃダメだってことくらい僕も分かっているよ。一二歳以下とは結婚も交際も難しいからね。心配しなくても僕が法を変えてみせるよ」

「そこは全然心配してませんから、お気遣いなく」

この変態は、一二歳以上との恋愛は最初から考えにないらしい。「良いかい、イリヤ君？ 一二歳までの女の子なら無条件で助けるのが、紳士道精神の基本だよ。異論を唱えるのは結構だけど、聞く耳を持つつもりはない。幼女バンザイ。美幼女なら、なおバンザイ。微幼女でも世界の財産。そこに存在するだけで皆の視界を潤わせる情報力を持つ個体なんて、他のどんな生物が有しているというのか（いいや、いない）」

「もう分かりましたから、どうか捕まらないうで下さいね」
そこはかとなく流すように言った。

すると、ライトは怪訝な様相で、

「捕まる？ 安心してよ。証拠は残さないのが僕のポリシーだから」
「どこの幼女に、どんな事実だけを残してきたんですか!？」

やっぱり警察行きましよう！ 一緒に頭を下げてあげますからね！？ とかなり取り乱した様子でわたわたとライトの腕を引っ張るイリヤ。

「ん？ 何を勘違いしているんだい、イリヤ君？ 僕はどれほどの罪人だろうと相手が一二歳以下の幼女なら指一本触れないよ？ 少なくともこちらからは」

あつ、とイリヤは声を上げた。

ライトは言う。

「いやね、低気圧が近づいてるらしいから、天気予報通りになりそうだと思っただけだよ、さっき外を覗いていたのは」

途端、イリヤの全身から力が抜けて、

「えっと、肘、痛む？」

訊ねると、ライトは軽く首を横に振って否定を示した。

「意識したら、くらいのレベルだよ。別のことに集中すれば忘れる」
ライトの声は本当に子守唄のように優しい響きを内包している。

滑らかに紡がれる言葉のリズムと、低めのトーンが柔和な物言いと調和して甘く溶け合い、彼のまとう空気を一段先へ大人びたものになっているのだ。

思春期真っ只中の乙女としては、少しでも気を緩めているとライトの態度が少しクラツときてしまうものがあった、微熱を帯びる顔を目の前の本人に悟られないよう、必死に頬に灯る火照りを冷ましたいわけなのだけれど、冷ます方法と言えば冷水を頭から浴びて邪念を払い、脳内をクリーンにすることに限るわけなのだけれど、今そんな奇行に走ったら単なる変人に降格してしまうゆえに、精神面から『自分、落ち着け』とアプローチするしかなかったわけなのだけれど……。

「ごめん、行こうか」

イリヤの小さな顔を待ってから、再びライトは廊下を歩き出し

た。

二人の歩幅は違うから、自然とライトがイリヤのテンポに合わせる形になる。

ギシッ、ギシッ、ギシッ、と傷んだ木がしなる音。

床が抜けるのではないかと不安を抱かせるそれが、静寂と冬の寒さに包まれている屋敷内に染み込んでいく。

二人分の足音が長い廊下に行く。

二人分の足音が長い廊下に流れる。

その静けさに耐えかねたわけでもなかったが、

「ライト君。今日、所長は？」

イリヤは前を見ながら問うた。

傍らを並歩するライトが答える。

「予定では帰ってくるはずなんだけど、たぶん例年通りだと思うよ。所長のスケジュールなんて予定があつてないようなものだから。所長が出張先から、この事務所兼社員寮になつてる幽霊屋敷に帰ってくる総日数、一年でどれくらいだか覚えてる？」

「多くて一週間、少なくて三日ですよね」

「正解」

隣を共に歩く少年がにっこりと笑む。

ちよつと金髪が眩しい。

イリヤは冷淡なふりを装って、自身の気持ちを偽るように、

「大変なんですね」

「所長が？ それとも僕が？」

「どっちもですっ」

ライトは分かっているのに、わざと質問して解答させる癖がある。ツン、と言つてのけたイリヤに、ライトは軽く笑い声をあげた。

愛想笑いのようにも聞こえるが、そうではないことを四年の月日がイリヤに教えてくれた。

「所長のあれは好きでやつてる病気みたいなものだし、確かに四年前まで僕も大変だったと自覚してるけど、今はそうでもないよ」

「そうなんですか？」

「僕は副所長なんていう肩書のデスクを与えられてるけど、その実それは所長と僕の二人で切り盛りしてた頃の名残だし、今は単なる雑用係だよ。それに思い出してごらん」

ライトは右手の人差し指で足元を示した。

「四年前、最初はジオフロントで三〇人も世話をしていただろう？でも、所長がほぼ年中無休で世界中を飛び回ってるから、一〇人まで減った。君たちのような優秀な人材も確保できたしね。まあクリスさんとかグレン夫妻、レスタさん、ウスタックさん、メリッサさん、アランさんは僕たちみたいにオカルトサイドの担当じゃないから、ここには顔出さないんだけどね」

「……私、四年もここにいますけど、所長や皆のことあんまり知らないんですね」

「無理もないよ。ほとんど事務所にいないんだから。それに所長の出先は、基本的に火薬臭い鉛玉が飛び交っている紛争地域だったり、悲鳴とか血生臭いオーラがわだかまっているギャング抗争の巣窟だったり、内乱で倒れそうな国の中だったり、危ないところばかりなんだ。ついていっても、イリヤ君は身が持たない」

「それなら、少し話してくれませんか。所長のことや、四年前のこと。私、まだ分かっていないことが多いです。そろそろ真相を知ってもいい頃ではないかと」

「いいよ。所長からは、すでにゴーサイン出てるしね」

ライトはあっさりと承諾し、少女めいた顔でいつものように微笑んだ。

「歩きながら話そっか。どうせ廊下はまだ続くんだし」

本当に恐ろしいのは火災ではない、とレーナは思った。

雲一つなかった夜の空から急に涙のような雨が降り出したから、ワラブリ屋根からワラブリ屋根へ延焼する炎は、徐々にその勢力を失っていった。

近頃は祈禱師たちがどれだけ祈りの儀式を続けても、村の田畑は干からびかけている状態から脱しなかったのに。

この期に及んで神様がせめてもの救いとして寄越してくれた通り雨だったのだろうか、レーナの頭上ではすでにたくさん星座が煌めいている。

いつもの夜空が戻ってきた、とレーナは天を仰いで思う。

でもいつも通りには戻らない、とレーナは濡れた前髪の雨滴もそのままに思った。

（遅いよ、神様）

燃えるモノがほとんど燃え尽きていたからこそ、津波めいていた火の海は間もなく消えたのだ。

山火事に発展しなかったのは、風のない日だったからか。

本来ならば、急ぎ足の雨雲ごときで鎮火できる火力ではなかった。彼女の村を襲った今回の惨事は、決して偶発的なものではない。

人の手で焼かれたのだ。

彼らはたぶん反政府軍の残党兵とか、傭兵崩れの寄せ集め、山賊の類ではないだろうか。

何の前触れもなく襲来した茶色い軍服の集団に、レーナの両親は蹂躪され、焼き殺された。

皆、死んだ。

老若男女問わず殺された。

村人全員から慕われ、そして誰に対しても優しくかった村長も、レ

レーナが大好きだった学校の友達や先生も、隣の家に住んでいた若い夫婦と二人の間にできた赤ん坊も、皆。

レーナは物陰に隠れていたから生き残れた。

恐くて声も出なかったのだ。

ただただ息を潜めて、悪意に満ちた嵐が過ぎ去って行くのを一人で待ち続けた。

レーナが賊に見つからなかったのは、たまたまだろう。

偶然以上でも以下でもなく、運が良かっただけ。

――運が良かった？

――本当に？

今、ここに立っているのはレーナだけなのに、家族を失って彼女だけが生き残ったことを本当に幸運と呼ぶのならば、それはなんて残酷な言葉なのだろう。

レーナの慟哭は、小一時間も前に枯れていた。

茶色い軍服を着た野蛮な男たちが殺戮を尽くして満足顔で村を去った後、レーナは丸焦げになった両親や村長を、スコップで掘った地面の穴に埋めて土を被せた。

さらに、その上になるだけ綺麗な石を集めて、まるで死者の慰めにならないお墓を作った。

むなしいだけの作業だと理解していた。

けれど、この場において唯一の生者であるレーナは、見つけることができた友達の何人かを埋めて、見つけることができなかった友達や先生には祈りだけを捧げて、顔見知りの人もあまりそうでなかった人も、できる限り埋めてあげた。

長い長い時間をかけて、雨だけではない水分を吸った土を掘る。

次々と横並びに完成されていく不出来なお墓の数を見れば、誰もが生存者の可能性について一縷の望みも残されていないと頭を垂れるだろう。

だからレーナも無言でお墓作りに没頭した。

全身を泥だらけにしつつ、ひび割れた爪の中に土が詰まっていく

のも気にせずに。

胸の周辺からせり上がってくる胃液と嗚咽を何度も喉の奥に飲み下して。

両目に涙を浮かべて鼻をすすりながらも、絶対に死者の墓にはこぼさない。

村の中でもレーナにとって特別に親しくて大切だった人たちが、まだたくさん見つかっていなかったけれど、レーナは安らかになれていない死者たちを発見次第、一人ずつ順番に埋める。

そこら辺に横たわる者たちは、まるで彼女に埋葬されることを待っているかのように沈黙していた。

しかし、レーナの強さもそこまでだった。

きっとここまで必死に逃げてきたのだろう、隣の家に住んでいた若い夫婦と、一歳にもならない赤子の黒焦げを村の端っこで見つけてしまった瞬間、レーナの思考回路はついに歯車の動きを止めて壊れた。

雨に濡れた土の独特な匂い。

そして何より新鮮な酸素がうまかった。

肺に溜まった有毒な煙が浄化されていくようで、レーナは必要以上大きな呼吸を続ける。

あの後、レーナは気づけば煤だらけの両足を動かして、月の明りだけを頼りに暗い山の中を歩いていた。

針葉樹と広葉樹が混生した原始林。

野鳥たちは寝静まっているのか息を潜めているのか、濡れそぼった森林に音はない。

ここは、村長の許可なく踏み込んで是不然ないと小さい頃から両親や先生に言われ続けていた北西の秘境だ。

けれど、レーナにとってそんな禁忌は、もうどうでもいい話だった。

死臭漂う黒い煙が満天の夜空を汚した方角は、今やレーナの遙か後ろにかすれている。

家族も友達も失った彼女は、もう全焼した村には振り返らないし、戻らない。

地面の土は先程の通り雨でぬかるみ、かなり歩きにくかった。

おまけに足場は平淡ではなく、やや傾斜している。

うっかり足を滑らせようものなら大変なことになるだろうに、レーナは全くと言っていいほど足下に気を配らず、そこにある前進のみを求めた。

時には樹の腹にもたれかかって、ふらふらと。

短い通り雨に晒されたレーナの髪や服はとくに乾き切っていたけれど、草木がうっそうと生い茂る山の奥はまだまだ湿っていた。

たまに深緑の葉から細かな樹雨が弾けて、レーナの煤まみれ土ま

みれな頬を涙の代わりに軽く濡らす。

道とは呼べない険しい道のり。

レーナの華奢な体を、そんな先へ突き進ませる原動力の正体は分かりやすい。

仄暗い復讐心だ。

突如レーナの村を襲った茶色い軍服の集団に、復讐するためだ。

彼らは戦争で使うようなゴツゴツとした装甲の改造自動車に乗って、レーナの村にやってきた。

あの兵器で破壊の限りを尽くし、その足で帰って行ったのである。追跡は可能だった。

ずっと人の手に染まらなかった樹齢何千年という神聖な山々の樹を、野蛮な彼らは野蛮な科学の力でなぎ倒して、山の神様をも恐れぬ四輪の足跡を残しているからだ。

レーナはそのタイヤの跡を獣道から追っていた。

しかし、だからと言って、徒歩が自動車の速度に追いつける道理はない。

ましてや仮に追いついたとしても、レーナに成せる術はないだろう。

複数人いながら銃火器を持つ大人の男たちに、非力な少女の四肢で一体どんな復讐が果たせると言うのか。

村の皆と同様、面白半分にいたぶられて、土くれに還るのが関の山だ。

でも、そんなことは百も承知の上である。

止まることはできないのだ。

歩かなければならない。

ここで止まると、きつと二度と両足に力が入らない。

涙と声は枯れてしまったけれど、悲しみは頭上の夜空のようには晴れていないのだから。

そうしてレーナは暗闇を歩き続けた。

飲まず食わず、黙々と、ただひたすらに、貪欲に貪るように、力

尽きるまで見知らぬ山中に行く。

歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。

歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。

歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。歩いた。

歩いていると無駄なことを考えなくて済むから楽だった。

憎悪にだけ徹していれば良いから楽だった。

（もう人間なんて大嫌い）

あの惨劇を目にしたら、もう人なんてイキモノが信じられなくなる。

人が人に対して、あれほど残虐なことを行えるなんて。

人が人を苦しめて、あれほど悪魔じみた微笑を浮かべられるなんて。

殺しの快楽を前提にした盗賊が最近、各地の村で出没している噂は、レーナが住んでいた村にまで届いていた。

だから万が一に備えて、彼女の村でもある程度の対策は施していた。

ところが、奥深い山の自然に四方八方を隠された農村の前時代的な守りは、世界の中心地帯で進歩し続ける科学力の前では、何の意味もなさなかったのだ。

もう、あそこには誰もいない。

レーナが一二年もの時間を過ごした、帰るべき場所は失われた。視野を世界規模に広めても今のレーナに寄る辺はなく、一人ぼっちだった。

（ああ、もう人間なんてやめたいな）

だが、レーナとして死ぬのは嫌だった。

安らかな死など想像できない。

皆の悲惨な死に方が瞠に焼きついて離れないのに、安楽死なんて

イメージできるわけがない。

（ああ、もう人間なんてやめたいな）
そこでレーナは考えた。

どうすればやめられるだろう、と。

生きながら人間をやめるには、どうすれば良いんだろう、と。

（あはっ、良いこと思い出したよ）

レーナは母から、こんな話を聞かされたことがある。

彼女の村から北西の樹海にひたすらひたすら進んだ先に、魔法使いが住んでいる、と。

いや、正確に言うならば魔法使いではなく、ネクロマンサー死霊魔術師だったか。レーナの記憶が正しければ確か、『死者をこの世によりみがえらせてくれる人のこと』をそう呼ぶはずだ。

そんなあやかしの術を使える人がいるなんて眉唾ものだけれど、本当に実在するのならそれは素敵だなとレーナは思う。

（そうだよ。その人に会いに行ってみようよ）

いつしかレーナの歩調は変わり、軍服の集団が手つかずの山にもたらした爪跡を追うのもやめて、進行方向をずらしていた。

名案が脳裏を過ったのだ。

（ネクロマンサー死霊魔術師さんに優しく殺してもらって、それから不思議な力で生き返らせてもらえば、きっと目が覚めた時には朝で、もう人間じゃなくなってるよ。だって、普通の人間は一度死んだら生き返らないもの。そうでしょ？ それなのに、生き返るのはゾンビだよ。アンデッドだよ）

人は、一人では生きていけない。

あらゆる面で他人の生活がなければ、生きていけない。
精神的にも肉体的にも。

レーナが住んでいた村だって、都会のように繁栄した人類社会からは閉鎖的だったけれど、それでも村の皆で助け合って生活をしていた。

でも、アンデッドなら食べ物はいらない。

よって働く必要がない。

つまり、人と関わらなくて済む。

ついでに死なない亡者なら、軍服の生者たちに一矢報えるかもしれない。

（あはっ、そうだよ。それが良いよね？）

ああ、でも断られたらどうしようかな、とレーナの心に不安が波打った。

ううん大丈夫だよ、とレーナは自身の背を鼓舞した。

（死霊魔術師ネクロマンサーさんは人間なんだろうけど、人間が嫌いだから山奥でひっそりと暮らしているんだよ。うん、そうに違いないよね？）

でないと不便だ。

レーナの村よりも不便だ。

他人の力が届かない秘境の生活は、色々と不便なのだ。

だったら、共感してもらえるはず。

（行こう。死霊魔術師ネクロマンサーさんに、殺されに行こう）

死ぬのはもちろん怖い。

その恐怖を払拭できたわけではない。

（だけど、同じ人間嫌いならきつと話を分かってもらえて、優しく殺してくれるはずだよ。そうしたら生き返らせてもらって、人間をやめるんだもん）

とレーナは自身に言い聞かせる。

まるでもう自分が人間ではないかのように、棚に上げた理念で。

「行こう。死霊魔術師ネクロマンサーさんに、殺されに行こう」

声に出して決意を固める。

レーナの壊れた思考回路から生まれた、そんな歪んだ希望こそが、皮肉にも彼女の肉体と精神を支え続けていたことに、誰が気づけただろう。

「夜遅くにごめんなさい」

レーナはペコリと頭を下げてから、顔を上げた。

乾いた唇の間から声を絞り出す。

「わたしはレーナと言います」

「……何の用だ」

「あの、わたしを殺してくれませんか？」

人里から遠く離れた山奥にまるで幽霊屋敷のような、たくさんの
蔦に絡まれた櫨の家を三日後の月夜に見つけたレーナは、その戸口
を二回ノックしてから、扉を開いてくれた初対面の青年に笑顔でそ
んなことを訊ねた。

彼女の笑みが壊れているものだ気づいているのかいないのか、
少女の唐突な訪問に応じた青年はにこりともしない。

見かけの通りなら歳はレーナよりも八つほど上だろう。

背は彼女の頭三つ分ほど高く、標準からしても長身の分類だ。
しかしながら、かなりの細身で、しわしわの白衣を着ていた。

ところどころに若白髪の本束が見受けられるボサボサの黒髪と、神
経質そうな目つきとクマ。

それと眉間に深く刻まれたシワ。

血行が悪いのか青白い顔をしていて、まるで病人みたいな、ある
いは何かの研究に憑かれたような青年だった。

ささやかな息遣いさえ聞こえてこない静寂な青年。
本当にこの人は呼吸しているのだろうか？

レーナが彼の返答を待っている間に訝しんでいると、

「自殺仲間を勧誘しているのなら帰れ。ここは死にたがりがくる場
所じゃない」

青年——カルマは抑揚のない低音を紫色の薄い唇からもらし、そ

のまま無下に扉を閉めようとしたが、

「知ってるよ、死霊魔術師さん」
ネクロマンサー

レーナの落ち着き払った言葉で、彼のドアノブにかけた手は止まった。

レーナはカルマへ畳みかけるように言い放つ。

「お願い、死霊魔術師さん」
ネクロマンサー。わたしを殺して、それから生き返らせて欲しいよ」

「……そんな特殊なサービスは取り扱っていない。それに俺は人殺しになどなりたくない。さっさと家に帰れ」

すでに帰るべき場所はなかったけれど、それを反論に利用せず、しかし引き下がれもしないので、レーナは返しの切り口を変えてみた。

「そう言うことなら……分かりました。依頼するよ」

「依頼？」

カルマは顔色一つ変えず、イントネーションだけで怪訝そうに問い返した。

レーナはこくと小さな顎の動作で肯定を示して、

「うん。今から死霊魔術師さんの手を汚さずに何とか自殺するよ。
ネクロマンサーだから、わたしが死んだことを確認したら生き返らせてね？」

正気か？ とでも言いたそうに、微細ではあるが眉をひそめることで初めて表情を崩したカルマの変化には構わず、レーナは縁に囲まれた庭に視線を移した。

大きな切り株の傍らに斧が無造作に放置されている。

刃は錆びていて切れ味はあまり良くないかもしれない。

あれで死ぬのは痛そうだ。

やめておこう。

なるべくなら痛くない方が良く決まっている。

できることなら一思いに、痛みを感じる暇さえなく死んで生き返りたい。

ふいに、レーナの脳裏に両親の焼死体が、友人達の断末魔がフラ

ツシュバツクする。

ぶわっと、全身に尋常ではない量の汗が噴き出した。

どろりとした恐怖心に負けて膝が笑い出す。

確認しようもないけれど、確認するまでもなく、顔はひどく青ざめているに違いない。

心の軋む音に気づいているレーナは、それでも人外を求めて、まづは死を求める。

他に何か使えそうな道具はないかな、と辺りを見回す。

すると、ちょうど良い太さと長さの縄が目にとまった。

作業用なのだろう、ノコギリとささくれだらけの木製の椅子もセツトだ。

ノコギリはいらない。

この死に方なら斧よりは痛くないかもしれない。

喉が苦しいだろうけれど、椅子に上った後に蹴り倒してしまえば、嫌でも逃げられなくなつて確実に死ねそうだ。

(あと必要なのは……と)

ここには太い木々が山ほどある。

レーナは、自身の全体重がかかっても絶対に折れることがなさそうな、頑丈な樹を探して回ろうとした。

でも、

「やめておけ」

早速、死を実行しようと左足から歩み出たレーナは、いきなりカルマに右腕を掴まれて、右足の踵が中途半端に浮く形で止まってしまった。

「? どうして止めるんですか?」

レーナは掴まれたままの右腕を一瞥してから、不健康な面様のカルマに視線を上げて小首を傾げた。

その所作に含むところはない。

無論、カマをかけたわけでもない。

『以前のレーナ』ならば、自身が本気で死を求めていることをカル

マにアプローチし、実際に行動に移そうとしたところを彼に止めさせた上で、どうして引き止めるのかを問い質し、交渉の主導権を握れるように仕向ける芸当くらいは思いついたかもしれない。

もっとも、『以前のレーナ』ならば、そもそも死を求めなかっただろう。

人外を求めなかっただろう。

そして、今のレーナの双眸には策略の曇りがなかった。

たった一二歳の少女の狂った純心を見下ろして、死霊魔術師は掴んでいたレーナの右腕を解放し、小さく吐息をこぼした。

「よくも俺が死霊魔術師だと確証を得ないまま死のうとできるな。」

俺が単なるペテン師だったら、まず取り返しがつかないことになっていたぞ」

「え、違う？ あなたは死霊魔術師さんじゃないの？」

「いや、誰が信じようと疑おうと、その事実は変わらんが……」

「だったら、良いよ」

にへっ、と無邪気に笑う少女にカルマは毒気を抜かれた顔つきで、

「お前が俺に何を期待して、ここに訪れたのかは概ね理解できた」

「ほんと？ それじゃあ……」

カルマの方に体ごと向き直ったレーナの双眸は、期待に膨れ上がった。

「確かに俺はペテン師じゃない。死霊魔術師だ。しかし、お前の依頼には応じられない」

「……どうして？」

しょんぼりと肩を落とすレーナの面持ちにはつが悪くなったのか、カルマはガリガリと後頭部をかきむしりながら彼女に背を晒し、

「少しだけ長話になる。入ると良い」

家の中への入出を許可した。

この山の夜は日中に比べて随分と冷え込むので、そのお招きはとてもありがたかった。

暖炉でほどよく暖められた優しい空気が、冷え切った全身の凝りを芯から溶かしてくれるようで、レーナは幸せな気分になった。

死霊魔術師ネクロマンサーに通された先は、広いリビングだった。

応接室はきちんとあるみたいなのに、彼はそちらには案内せずにダイニングテーブルを勧めてきたのだ。

レーナは断る理由もなかったもので、というか暖炉に近かったので、むしろ嬉々として椅子を引いたが。

カルマはキッチンの方に消えて行った。

食器の音がする。

客人を放置して洗いものでも始めたのだろうか。

だとしたら、なんてマイペースな人なのだろう。

まるで猫みたいな人だ、とレーナが極めて勝手な感想を描いた理由は、部屋の模様から無意識の内に影響を受けたせいだろうか。

レーナは無遠慮にも、人様の家を好奇心の目で眺め回す。

リビングは一人で暮らすには寂しいくらい開放的なのに、その孤独を和らげる家具は必要最低限のものしか置かれていなかった。

質素な生活をしている様がこの内装で十分に窺える。

老後の生活を謳歌する人間だってここまでシンプルには生きられないだろう。

ただし、よくよく室内を見渡すと違和感を覚える者もいるはずだ。飾り気のない部屋の至るところに、黒猫を模した雑貨類が密かに組み込まれているのである。

ファンシーな小物から芸術的な置物まで、そこに統一感は何もない。その中でもレーナの視線をひと際、惹いたものがあった。

「綺麗な黒猫さん」

ダイニングテーブルの中央に大事そうに飾られている、見事なガラス細工の黒猫。

レーナがそれをうつとりとした表情で見つめながら呟くのと、カルマがリビングに姿を現したのは、ほとんど同時だった。

レーナはすかさず訊いてみる。

「家中に黒猫さんグッズがあるね。カルマさんの趣味？」

「テーブルのそれは師のかたみだ」

他の黒猫グッズに関しては、ノーコメントだった。図星なのかもしれない。

「カルマさんの魔法先生？」

「それだけじゃない。俺に生きる術を教えてくれた恩人だ」

カルマは黒猫の形をモチーフにした、可愛いマグカップを手に入っていた。

どうやら彼はキッチンで温かい飲みものを淹れていたらしい。

マグカップからは湯気が立っている。

けれど、カルマは一つしかマグカップを持っていない。

自分が飲むためのものだろう。

一口で良いから飲ませてくれないかな、とレーナは喉の渇きを覚え、カルマに視線で訴えてみた。

ここ三日間、食事はおろか、ろくに水分も摂っていなかったのだ。

「中身はホットミルクだ」

カルマは黒猫のマグカップをレーナの前に差し出した。

あれ？　　と思ってレーナはカルマの瞳を覗き込むと、彼は視線を逸らし、

「俺は猫舌なんだ。基本的に熱いのは飲まない。こいつは客人用に用意しているものだ。だから、ミルクが嫌いじゃないのなら飲め」
虚をつかれたものの、レーナはぺこりと頭を下げてからマグカップを受け取り、ずずと音を立てて飲む。

温かくておいしい。

なぜだか心まで温まる。

これが魔法の効果だったら素敵だなと欲張ったことまで思った。

カルマはレーナの向かいに腰掛け、ホットミルクの温度とは正反對に冷淡な声音で、彼女を突き放すように口火を切った。

「一つ、勘違いを正しておこうか」

「？」

「さっきも言ったように、俺はお前の依頼に応じないんじゃない。応じられないんだ」

意味は分からなかったけれど、レーナは根気強くカルマの続く言葉を待った。

「確認するが、お前の願いは一度死に、そして生き返ることで人間ではない何か、つまりアンデッドになりたい。……間違いはないか？」

うん、とレーナが控えめに首肯すると、カルマは軽い溜息をこぼした。

「そもそも、そんなことは俺にはできない」

「え？　でも、カルマさんは死霊魔術師さんじゃ……」

「死霊魔術を神の奇跡か何かと思っていらないか？」

「えっと……」

まさにそれに近いものだと思像していたので、レーナは返答に窮した。

言葉を詰まらせるレーナを見て、カルマは真剣味を帯びた声質で言う。

「死霊魔術は『死者をよみがえらせるための魔術』じゃない。一時的に死者の魂を現世の肉体に繋ぎ止め、『失われた情報を死者の口から汲み取るための魔術』だ。用途が違う。あれは自然の摂理を生み出した神を冒瀆する黒魔術であり、神の奇跡とは真反対にある人工の奇跡だ」

つまり。

本当の意味で、人は一度死んだらよみがえることはできない。

「魔術の発動には、魔力というコストが必要だ。そして魔力の原材料は術者の生命力——つまり、俺の寿命だ。死者の魂を現世に連れ戻すだけでも、俺の生命力は随分と枯渇する。さらに魂と肉体の接続を維持するだけで、俺は生命力を消費し続けなければならない。お前の願いを紛いものとして叶えようとしたら、俺が何人いても足

りないんだよ」

そんな……、とレーナは呟く。

カルマはやや前屈みになっていた姿勢を楽にして、背もたれを軋ませた。

「どうして、そんなに人をやめたがる？」

「わたしの家族が、村の大切な人たちが殺されたからだよ？」

レーナは淡々と答えた。

「同じ人間なのに、同じ人間に、お父さんもお母さんも目を覆いたくなるくらい酷い殺し方をされたよ。だから、その酷い人間たちと同じ人間でいたくなかったの」

「当たり前でしょ？　とでも言い出しそうな口調で言い切った少女。

カルマは僅かに瞳を細め、訊ねる。

「覆いたくなるくらい、か。お前は両親や皆の死から目を背けなかったのか？」

「だって、わたししか生き残ってないもんね。皆のことを覚えていてあげられるのは、もうわたししかないのよ？」

それでもレーナは笑った。

どうしようもないくらい、中身がない笑みを湛えた。

カルマは何か考え込むような仕種をし、

「お前の村を襲った連中の格好を思い出せるか？」

「うん。茶色い軍服を着てたよ」

カルマはまたぞろ重い溜息をついて、

「エリア・シースルーワ作戦か」

と言及した。

レーナはきよとした顔で問う。

「エリア・シースルーワさくせん？」

「ああ。お前は知らないだろうが……表沙汰にできない問題を起こし、国の軍隊から追放された者が主に構成員となっている小規模のテロ組織が存在する。所属している連中のほとんどが、単に殺しに飢えている殺人狂だ」

「もしかして、その人たちが、わたしの村を襲った？」

レーナの質問には直接答えず、カルマはエリア・シースルーワ作戦について話を続けた。

「バルアセーヌ市国の政府が、暗部で秘密裏に開発した新型ウイルスがある。政府は新型ウイルスの実験――つまり、人から人への感染力を観測するために、兵隊崩れのテロ組織と共謀して、どこか適当な村を襲うように指示した。テロ組織が政府から襲うように指定された村は、おそらくお前が住んでいた村じゃない。別の村だ」

レーナは悲しげにまなじりを下げた。

「そんなのひどいよ……」

「政府はあらかじめ新型ウイルスのワクチンを作り出し、貯蓄していたんだ。辺境の地を発信源にして新型ウイルスをまき散らし、庶民から金を絞り取ろうという分かりやすい陰謀だ。その極秘作戦をひっくるめてエリア・シースルーワ作戦と呼ばれている」

「でも、どうしてわたしの村は……？」

カルマはレーナの視線を真正面から受け止められず、無表情のまま瞳を閉じて、告げる。

「テロリストたちは、政府に対して作戦が成功した暁の報酬の他に、条件を出していた。ウイルスをまき散らす村の他に、近隣の村を自由に襲わせろ、とな」

「……」

「政府の答えはこうだ。『一つだけなら黙認してやる』。そうして、政府の暗部と犯罪組織の取引は成立した。……その『一つだけ』が、お前たちの村だったんだろう」

カルマの言葉を最後に沈黙が訪れた。

暖炉の中の炎がパチパチと爆ぜている。

レーナの大切な人たちを飲み込んだ火。

それは同じなのに、なぜこうも感じる印象が違うのだろう。

どうしてこうも極端なまでに、幸福と不幸の属性に別れてしまったのだろう。

レーナは黒猫のマグカップに視線を落とした。

カルマは少女が口を開くのを待ち続けた。

やがて気持ちとの折り合いをつけたレーナが、ゆっくりと顔を上げる。

「……どうして、カルマさんは色々知ってるの？」

「傍受したからだ」

もっともな疑問をぶつけてきたレーナに、ネクロマンサー死霊魔術師は淀みない口調で応じた。

「式神と言つてな、界限に昆虫の形を模した精霊を遊ばせている。彼らが見聞きした情報は、イコール俺の情報になるわけだ。こんな場所に一人で住んでいると外の情報は、なかなか収集できない。だから自分の身は自分で守るしかない。エリア・シースルーワ作戦において、俺にもウィルスの火の粉がふりかかる可能性を考慮したから、警戒して探りを入れただけだ」

カルマはネクロマンサー死霊魔術師だが、ネクロマンサー死霊魔術以外の魔術を扱えないわけではない。

ネクロマンサー死霊魔術師とは要するに、ただ単純にその分野に特化した魔術師のことをそう呼ぶのだ。

カルマも魔術に関するベーシックな術式や知識は、しっかりと固めている。

あえて過言に表現するならば、魔術師とは汎用的でなければ、彼のように何かにスバ抜けることができないものなのだ。

「それで、だ。実はエリア・シースルーワ作戦における後日談がある。訊きたいか？」

レーナの頷きを確認すると、カルマは真実をあばき始めた。誰に対しての労りにもならない真実を。

「俺は一度、何かに対して興味を抱き調べ出したら、その何かに関する情報を徹底的に把握しなければ落ち着けないタチでな。エリア・シースルーワ作戦も、俺の生活圏を僅かながら脅かす対象だったため、例外ではなかった」

もっとも好奇心は猫を殺すと言うが、今回の諜報活動は興味本位ではなく、自己防衛のための注視という類だが、とカルマは補足して、

「そういうわけで俺はあの作戦の全体像を浮き彫りにするまで、隠密性が高く情報収集に長けた式神を行使し、国の諜報機関とテロ組織の双方を傍受し続けた。結果、分かったことがある。それはテロリストたちが、政府の連中に騙されていることに気づいていなかった、ということだ」

「騙されて？ どういうこと？」

「作戦自体がブラフだった。政府が本当に共謀していたのは、ウイルスをまき散らせとテロ組織に指定した村の方。村の住人には、作戦実行の一ヶ月も前にワクチンが与えられていた」

「？ ？ ？」

「まずまず首を捻るレーナ。」

彼女の反応を視認したカルマは囁んで含めるような説明をする。

「要するに、政府の目的は『新型コロナウイルスの実験』でも、備蓄した『ワクチンで庶民から金を巻き上げる』ためでもなく、その欺瞞によって釣れたテロ組織の壊滅だったんだ。テロリストたちは、なまじ国黒い裏の顔を知っているような兵隊崩れの連中だったから、政府が犯罪組織に依頼を持ち寄ったことをあまり疑わなかったんだろう。裏をかかれたわけだ」

「……それで、どうなったの？」

「そのテロリストたちは政府に言われた通りガスマスクを着装してから、新型コロナウイルスを撒き散らした。政府の暗部で開発されたソレが、皮膚呼吸のレベルで感染する殺人ウイルスだと知らずにな」

「その村の人たちは？」

レーナは非道なテロリストたちよりも、当然その村人たちの安否の方が気がかりだった。

「開発された新型コロナウイルスは、ワクチンで完全に消滅するものだ。だが、前もって打っておかなければ意味がない。村人は全員、政府

の指示で予防のワクチンを打っていた。そして、万が一に備えてワクチンを渡されていたものの、感染後に打つように指示されていたテロリストたちは、全員死んだ」

ウイルスに空気感染した村は完全封鎖されて、政府はその村の住人たちに新たな土地を与えて移住させているという。

テロ組織の撲滅行動における協力を感謝され、色々と便宜がはかれるようだ。

「テロ屋さんたちは皆、死んだ……」

「ああ」

「それが本当なら、わたしのお父さんやお母さんは……家族は……」
間接的に、国に殺されたようなものだ。

「そうだな。しかし……いや、別に国を擁護するわけではないが」
とカルマは前置きして、黒猫のマグカップを覆う両手の力を強めるレーナに語る。

「政府は連中に条件を出していた。別の村を自由に襲うのは、指定した村にウイルスをまき散らしてからだ、と。テロリストはその順番を勝手に逆にしただけだ」

けれど、そんな事実がレーナの救いになるはずもなく、

「……やっぱり人間なんて大嫌い」

「そうか。まあ、ともかく俺の知っていることは全て話した。それを飲んだら、もう……」

と、それ以上の言葉が言えないことに、口に出してしまってからカルマは気づいた。

「どこに？」

「……」

「わたしは、どこに帰ればいいのかな？」

レーナは無邪気に微笑んで、マグカップに口をつけた。

味は悪くなかったけれど、ホットミルクはもう冷め気味だった。

それから中身を一息に飲み干し、椅子を引いて立ち上がる。

「ありがとうございます。カルマさん」

レーナは頭をテーブルの上にぶつけるくらいまで下げて、出て行くようにする。

「待て」

カルマは軽く舌打ちをしてレーナを呼び止めたが、彼女は止まらなかった。

否、レーナの力が足元から抜け落ちた。

不思議なことではない。

むしろ、レーナがまだ立っていることの方が異常だった。

原因など言及するまでもない。

ここにきて、ようやくレーナの感覚に体力の限界が追いついたのだ。

飲まず食わずの三日三晩が連続した。

肉体的な疲労も精神的なストレスも、相当なものだった。

それでも、レーナは絶望的な気分の中、不眠不休で歩き続けた。

秘境中の秘境に住む死霊魔術師の家からこぼれる光を見て、その微かな希望だけが彼女の心の支えとなり、体の原動力となり、細い両足と精神を折らず、ここまで運び続けた。

でも、その希望がストレートに打ち砕かれて闇に塗り替わった瞬間、レーナの体力に見合わない無理が祟って、ふらついてしまったのだろう。

本来ならば、そのまま床に倒れてもおかしくはなかったが、これ以上カルマには迷惑をかけられないと思い、レーナは摩耗した気力で体勢を立て直そうとした。

しかし、だからこそ。

レーナはダイニングテーブルに体当たりのような勢いで、ぶつかってしまった。

その強い衝撃で。

テーブルの中央に飾られていた、あの黒猫のガラス細工が不安定に揺れて。

転がって。

テーブルの上から床に――

「あっ」

パリン、と甲高い音。

一目で高級な芸術品だと分かる、そしてカルマにとっては高級で芸術的なこと以上に大切な品だと分かるそれが、ただの破片になって床にばらまかれた。

カルマの恩師のかたみが、修復不可能な形に。

血の気が引いた。

「あつ、え、えつと、あのっ」

即座に謝ろうとした。

しかし動転しすぎてしまい、レーナの舌はしびれたように鈍く、上手く回らない。

言葉を思い通りに作れない。

カルマはしばらく無言で黒猫の破片を見つめていたが、やがて立ち上がり、波風立たない低い声を発した。

「気にするな」

けれども、その沈着な言葉とは裏腹に、死霊魔術師はレーナと目を合わせない。ネクロマンサー

「他に行くところがないのなら、行くところが見つかるまで、ここに残っても構わない。腹が減ったのなら冷蔵庫を漁って勝手に食え。汚れを落としたいのなら向こうに浴室があるから、湯を張れば良い。眠りにつきたいのなら、あっちに空いている部屋がある。埃を払えばベッドが使えるだろう。着替えは悪いが男物しかない。それで我慢できるならば、使うと良い」

ただし、と言葉を区切り、カルマはこれこそが重要だと言い聞かせるように、

「ここにいてもお前の願いは叶わないと思っておけ」

最後はレーナの覚悟を試すように冷たく言い捨て、

「それと、俺の仕事部屋には絶対にくるな。分かったな？」

リビングに隣接する自室へと向かい、それっきり閉じこもってし

まった。

レーナは立ち尽くし、床に散らばったガラスの破片に視線と吐息を落とした。

「どうしよう」

粉々になっても暖炉の明りをきらきらと反射するカケラたち。

レーナはしゃがみ込み、一つ一つを丁寧に拾った。

どうあっても直せない。

責任を取って、すぐにここから出て行くべきだろうか。

これ以上は迷惑をかけられない。

いや、でも多分それは逃げだ。

言い逃れだ。

居心地が悪くなったから、彼に合わせる顔がないから、出て行くのだなんて。

「……ご飯を、作ってみようかな」

不健康そうな死霊魔術師。ネクロマンサー

今のレーナも人のことを言えたなりではなかったが、

「……美味しいご飯を作って、謝ろうかな」

家事全般とは言えないまでも、料理ならば自分の右に出る者はお母さんくらいしかない、とレーナは自負していた。

翌朝。

ジャージ姿のレーナはカルマの仕事部屋の前に佇んでいた。

彼は昨日の晩から、ずっと自室にこもっている。

仕事をしているらしいが、魔術師ではないレーナには魔術師の仕事がどんなものか分からなかった。

机に座って数式を書き込んだりする作業なのだろうか。

それともベタな感じに大窯で紫色の液体を火で煮ながら混ぜているのだろうか。

少し鼻をすすってみたけれど、秘薬的な変な匂いはしなかったから違うのかもしれない。

レーナは視線をリビングの中央を陣取るダイニングテーブルに移す。

プレートの上に乗る皿は、綺麗に片付いていた。

食べてもらえて良かった、とレーナは声に出さずに喜ぶ。

昨夜、あれから冷蔵庫の食材を使って、けっこう手の込んだ料理を作ってみたのだ。

食事が完成した段階でカルマを呼んでも良いか分からなかったのだ、冷めても不味くならないものを作って、保管しておいたのである。

本当は温かい方が美味しいのだけど、仕事の邪魔をしないように釘を刺されているので、一人で食べた。

「くしゅんっ」

なんだか鼻の奥がむずむずした。

ティッシュを一枚とって、鼻をかみながらレーナは考える。

（これから、どうしようかな）

湯船に浸かって汚れも落とした。

睡眠もたっぷり取った。

溜まっていた食器は洗った。

拭き掃除はちよつと恐くてできない。

黒猫ガラス細工の二の舞を踏むかもしれないから、もう少しこの家に慣れてからの方がいい。

（あ、洗濯が残ってるよー）

家の近くには安定した山水が川みたいの流れていた。

地下に水脈があるのか、水には困らなさそうだ。

あそこは使えるかもしれない。

そう言えば、この家には電気もきちんと通っている。

天井には蛍光パネルがあつて、夜になれば活躍する。

でも、生活必需品はどうしているのだろう。

一年に一度、街にでも下りて一年分を買い込むのだろうか。

カルマの見るからに不規則そうな私生活を想像しながら、レーナは汚れた衣服が見つかり次第、カゴに詰めて込んで家を出た。

ネクロマンサー

死霊魔術師の家を捜している道すがら発見した、綺麗な山水。

レーナはそこでじゃぶじゃぶと洗濯物を洗うことにした。

「くしゅんっ」

ずるずる。

「夜じゃないのに、寒くなってきた」

まだ真昼なのに肌寒さを感じて、レーナは座っていた岩場から立ちあがった。

木々の枝を利用した自作の物干し竿で乾かしていた洗濯物を、カゴの中に取り込んで帰路につく。

寄り道をしないと一〇分もせず、蔦に覆われた檜の家に到着した。鍵はない。

そのまま玄関を開いて長い廊下を進む。

レーナがリビングに戻ると、窓の外を眺めながら氷入りのホット

コーヒーを口に行っているカルマの姿があった。
心なしか目元のクマが少し濃くなっている。
白髪まじりの黒髪も相変わらずボサボサだ。
少し老けたのではないだろうか。

「どこに行っていた」

カルマは外の景色を見つめたままレーナに問いかけた。

「え、えっと……洗濯物を……あの、迷惑？」

「いいや」

レーナは内心ホッして、洗濯物カゴを置く。

会話のきっかけが訪れたので、昨日の件について彼に謝ろうとした。

——のだけど、寸前、どういうわけか目の前がぐるぐると回転していくような錯覚に襲われて、レーナは立っていられなくなった。

「あ、あれ……？　なんだか、頭がふらふらする……よ？」

しゃがみ込む。

気持ちが悪い。

床が天井に見えてきた。

「それはそうだろう。無茶をし過ぎだ」

「へ？　そうなの？」

「自身のことだろう、体調管理を怠るな」

言いながらカルマは自身が持っていたマグカップと、ダイニングテーブルの上に用意していた黒猫のマグカップを交換し、後者のマグカップを昨夜と同じようにレーナに差し出した。

「ほら、これを飲め」

「ホットミルク？　また、わたしのために作ってくれたの？」

「コーヒーのついでだ。いいから早く飲め」

「うはひ」

呂律もままならないレーナは素直に受け取ってそれを飲み干した。
でも、ホットミルクとは違う味が舌に広がった気がした。
ちよっと苦い。

カルマは空になったマグカップをレーナに返してもらい、またダイニングテーブルの上に戻す。

「安心しろ。単なる風邪だ。疲労からきてるんだろう。すぐに治る」
「風邪？　これが風邪？　わたしは元氣と家事だけが取り柄なのに――って、あのっ、な、何ですか？」

カルマが無言で背中を向けてしゃがみ込んだので、レーナはうろたえてしまった。

「そこは寒いだろう。ベッドまで運んでやるから乗れ」

「い、嫌ですよ」

「何？」

「わたしは風邪なんて引いてないよ。自分で歩けるよ」

一〇〇人中、一〇〇人が聞いて強がりだと分かる嘘だった。

「……なぜだ」

カルマは立ち上がりつつ、冷たい床にペタンと座り込んでいるレーナに振り返った。

詰問するようなカルマの眼差しに、レーナは答える。

「だって、カルマさんに迷惑をかけたくないもの。もう、一人になりたくないもの。あんな酷いことをしてしまった後で……、もう迷惑を一杯かけてしまった後で、こんなことを言うのは、とっても性格が悪いって分かってるけど、でも……それでもわたしは……」

レーナは小さな手のひらを握りしめた。

それでも彼女は泣かない。

涙の代わりに笑顔をこぼす。

心にもない、それこそ、がらんどうの笑みをこぼす。

「い、一日の間で一度だけで良いから、一分だけでも良いから、こうして……カルマさんと話したい、から」

だから、レーナはカルマに迷惑をかけて、邪魔に思われて、嫌われるわけにはいかなかった。

あれだけ人間を嫌いに思ったはずなのに。

カルマはもう一度しゃがみ込み、膝に手をついてレーナの目線に

高さを合わせる。

まるで対等の立場で会話をするかのように。

「誰が迷惑をかけるなど言った」

レーナは悲しそうに微笑んだまま、

「だって、お仕事する部屋にはくるなって言ったよ？」

「ああ、そうだ」

カルマは頷いた。

レーナは、ああ、やっぱり、と思う。

やっぱり、邪魔になっているのだ。

存在しているだけで、もう十分に彼の迷惑になっていて、すでに嫌われていたんだ。

当たり前だ。

見ず知らずの他人が、いきなり転がり込んできて良い顔するわけがない。

あまつさえ、あんなことをしでかして。

（——もう、どこにも行くところないや）

「確かに言った。お前に仕事部屋にはくるなと」

けれど、それはレーナの勘違いだった。

そして、それはカルマの言葉不足のせいで生じた、小さな擦れ違いだった。

「俺の仕事部屋には、魔術関連の危険物が転がりまくっているからだ」

レーナははっとして両目を見開き、カルマの瞳を見返した。

鳶色の双眸だ。

「あの部屋には素人が手を出せば、辛い思いをするものがある。例えば、記憶を追体験するように鮮明に蘇らせてしまうもの、とか、な」

それは今のレーナにとって完全な精神崩壊をきたしかねない危険性を孕んでいる。

「じゃあ、あれは、わたしのことを思っ……?」

答えの分かり切った問いかけに、カルマはわざわざ口を開いたり
はしない。

その代わりに――

「レーナ、お前はもう十分に傷ついたはずだ。大切な者たちを目の
前で失って、たった一人になって、この家まできた。俺には想像も
つかない悲しみを乗り越えて、こんなにもぼろぼろになって。だっ
たら、もう我慢する必要はどこにもない。心のないまま笑ってい
って、そいつはお前自身を傷けるだけなんだ。だから……」

――カルマは、レーナを真正面から抱きしめた。

それはまるでヤマアラシのジレンマみたいに、とても不器用な動
作だったけれど、カルマはレーナの小柄を胸の中に包み込むように、
父親のように、できる限りの優しさをもって、彼女を抱きしめた。

「……だから、もう一人で泣くな」

沈黙があった。

腕の中に抱きしめたカルマの位置からでは、彼女の表情は窺えな
い。

レーナは今、そこでどんな顔をしているのだろう。

笑っているのだろうか。

泣いているのだろうか。

「わたしが泣いて迷惑じゃないの？」

カルマには分かった。

ああ、後者だ、と。

いや、正確には後者に傾きかけている、と。

だって、レーナの声は震えている。

「迷惑なものか。誰がそんなことを言った」

「わたしの泣き顔を見て、笑ったり、しな、い？」

「誰が笑うか。笑った奴は俺が説教してやる」

「このまま、泣いて、も、いい、の？」

「ああ」

ぶっきら棒な相槌だった。

聞きようによつては怒っているかのような声。

けれど、レーナには十分に響く言葉だった。

「涙と、はな、みずで、ぐ、ぐちゃぐちゃに、なっちゃうよ？」

「構うか。どうせ、お前がまた洗濯してくれるんだろう？」

——ここにも良い。

そう言われている気がして、ついにレーナの涙は嗚咽と共に溢れ出した。

誰かの胸を借りて泣けることが嬉しかった。

カルマの懷に顔を埋めて、白衣を強く握る。

泣いた。

とにかく泣いた。

慟哭は枯れてしまったと思っていたのに。

もう弱い涙は流さないと決めたのに。

彼女の決心を裏切るように瞼や鼻の奥は異常に熱くて、次から次へとレーナの頬とカルマの白衣を濡らした。

それでも、レーナは感じていた。

この涙の意味が、住んでいた世界を失った時のものとは異質であることに。

温かい。

上手く言葉にできないけれど、心が温かい。

人は心が寒くて涙を流すことはある。

でも、心が温かくても人は泣けるんだな、とレーナは思った。

「レーナ、そのままが良い。訊いてくれ。今日から一週間後、お前を俺の仕事部屋に招待してやる。危険なものは取り除いておくから」

レーナはまだカルマの胸で泣き続けていた。

それでも、カルマは続けた。

相も変わらず、抑揚のない声で。

「だが、今の俺はある研究に忙しくてな。もう少しで完成するんだ。

だから、それまではあまりお前には構ってやれないだろう。それでも、ここに残りたいのなら――」

――残ると良い。

そう言いかけた寸前で、カルマは言葉を変えた。

「ここをお前の帰るべき家にするといい」

間隙は一秒もない。

「……カルマさんが一緒に住んでくれるなら、わたしはいる。ここに
いるよ」

「そうか」

「お願いです。お約束して。わたしに黙ってどこにも行かないって」

「……分かった。約束しよう」

途端、安心したのかレーナの全身から力が抜け落ちた。

カルマは慌てて彼女の体を支え直す。

思ったよりもレーナの体重は軽かった。

本当に涙と鼻水で彼女の顔は大変なことになっていたが、泣き疲れているレーナをカルマは決して笑わなかった。

そして、呟く。

「……すまない」

守れもしない約束をしてしまったことを。

けれど、その約束はできる限り形に残すから。

それから一週間、魔法の薬でも飲んだかのように一日で元気になったレーナと、カルマの奇妙な生活は始まった。

食事を作り置きしておく、レーナが寝ている間、つまり深夜になつてからカルマは自室から出てきてそれを食べた。

彼は全て残さず食べてくれた。

おいしいとは一度も言ってくれないのが、少し寂しかったのだけれど。

二人が顔を合わせるのは一日の間で、長くても五分くらいだけ。カルマは四六時中、自室に閉じこもっているけれど、会った時は色んな話を聞かせてくれた。

たとえば、魔術師が少ない理由。

魔術師の性質は、カルマいわく『人一倍に諦めが悪い』ことらしい。

財力や権力、科学力で叶えられなかった悲願を、どうしても諦められなかった者が、藁をも掴む思いでオカルトの道を選択するといふ。

そこでまず、運良く魔術師になれる者となれない者で運命は分岐する。

魔術の存在を信じるか否か、ここで多くの人間が否定的概念を用いるのだろう。

では、その難関を突破し、魔術を信じたとしてどうやって学ぶか。師を求めるにせよ、独学にせよ、その環境は整っているのか。

己の魔力を自覚し、それを魔術に昇華するための回路を見出すかはあるか。

ほとんど世俗との関わりを閉ざし、残りの人生を魔術に投資する覚悟はあるか。

など、チェック項目は様々なようだ。

悲壮な思いまでして叶えたい願いを抱くのは、やはり大人が多いとカルマは言っていた。

けれどジレンマなのは、魔術師は年をとった分だけ不利になるらしい。

個人差こそあれど、魔術の基礎を習得するのに大抵は六年を要するからだという。

その後、応用を習得するのに、四年。

そこでようやく素人に毛が生えたと言える段階だ。

九年の学習時間を経て魔術師の卵が完成する。

そこまで時間を労しても、望んだ未来を獲得したとは言えないのだから、魔術師も万能ではないと知れる。

なぜなら、先人が歴史的に築いた魔術の基礎応用を学んだ先の道は、自身が導かなければならないからだ。

誰も教えてはくれない。

魔術に縋ってでも叶えたかった願いに繋がるのは、己の努力のみだ。

もしも過去の魔術師が、自身と似たような願いを求めて魔術の研究していたのならば、その先人の知恵を借りるなり、研究資料を閲覧するなり、多少は緩やかな道を進むことも可能だろう。

けれど、大抵はその先人も悲願を遂げられていないケースが多い。カルマは言っていた。

『極端な話をしよう。例えば魔力を無尽蔵に精製できる永久機関の開発。こいつは、簡単に言ってしまうば不老不死だな。魔力は術者の寿命を源泉にしている。ということとは、不老不死でなければ、無限の魔力は生み出せないというロジックだ。無論ながら、いまだ魔術によって永久機関の開発には至っていない。不老不死の理論を積み上げた魔術師は五万という。文献も残っている。不老不死の用途は違うにしても、それを願った魔術師たちが、不完全な文献の後を継いで頓挫していた研究を受け継いでいたりもする』

しかしながら、それは皮肉なものだ。

魔術師たちは不老不死の研究に魔術を使わなければならない。

己の寿命を枯渇させながら、不老不死を求めているのだから、本末転倒だ。

そして残念ながら早死にしている者が多い。

『……あるいは、「不老不死」という月並みのテーマではなく、誰もが叶えようとしなかった願いを追い求める魔術師がいたとする。そいつの場合、九年間を終えた先は完全に手探りだ。願いの成就に到達するための、行程とロジックを矛盾なく思考しなければならぬ。それはかなり、困難なことだ。叶うか叶わないか、進んでいる道が正しいのか間違っているのか、前例がない分、判断できない。それができるのは、観測者だけだからだ』

己の人生全てを賭してまで叶えたい願いがある者、魔術師。

金や科学で解決できる問題を抱えた者は、オカルトなどに目を向けたりはしないのだろう。

さしずめ魔術とは最後の希望。

不可能から可能性を見出すための、最後の法則。

そんな、魔術師カルマは、一体どんな研究をしているのだろう。

当然、レーナの心にわいて出る疑問である。

死霊魔術の研究なんて想像もつかない。

重箱の隅までほじくりたくなるくらいに興味はあったけれど、何を訊いてもカルマは教えてはくれなかった。

けちんぼうである。

（魔術であの黒猫さんは、治せないのかな）

たぶん、できないのだろう。

黒猫のガラス細工、カルマの師のかたみは今、レーナの部屋に置いてある。

まだ粉々になったままなのだけれど、必ず、どうにかして修復して、彼に返す。

魔術でできないからって、他の方法がないとも限らない。

だから、その時に、謝るために。

西大陸の最南端に位置するバルアセーヌ市国。

人口は一〇〇〇人にも満たないが、ゴミ一つ落ちていない美しい街並みの主権国家だ。

現在バルアセーヌ市国は軍事を有しておらず、国内の治安は外国から雇った傭兵で構成された警察機動隊によって守られている。

そしてこの年、この国の象徴であり、名ばかりの統治者ルアールⅡバルアセーヌ一七世の本葬が国をあげて行われ、各国から首脳陣が貴賓席に会葬した。

バルアセーヌ市国委員会の管轄で開催された壮大な葬儀だったが、バルアセーヌの警察機動隊のみでは総員数の問題から全体をカバーし切れず、テロを完全に警戒することは不可能、ということで委員会は外部から部隊を取り寄せたのだが――

そこにテロリストが紛れていた。

昨日未明、バルアセーヌ市国でテロ組織〈エンゼル個人投資家〉による誘拐事件が発生。

誘拐されたのは行政庁長官ワルサー氏――の長女ステラ嬢。

夜明けと共にラジオにて読み上げられたテロ組織〈エンゼル個人投資家〉の犯行声明にて明らかになった政府への要求は、ただ一つ。

今から九年ほど前――正暦一九九一年に起きた、とある事件の正式公表。

国の勝手な都合で『なかったことにされた事件』をバルアセーヌ国民および、全世界に向けて包み隠さず開示すること。

それ一つだった。

都市部が警察機動隊の出動で慌ただしく混乱している頃、海鳥が平和そうに鳴くバルアセーヌ市国郊外は、網膜を突くかのような朝焼けをダイレクトに浴びていた。

清潔感を伴う白亜色の住宅こそ建ち並んでいるものの、まるでそこに見えない線でも引かれているかのように、一定の領域から建物の不可侵とされた海岸周辺に、一切の遮蔽物が置かれていないからだ。

ただし、そこに侵入できないのは家だけである。

海と空の青が彼方で混じり合う地平線を一望できる海岸沿いに立てば、構築物に馴染んでいたはずの視界は圧倒的な解放感に満たされるだろう。

だが、自身が住まう星の雄大さと、それと比べた自身の存在のちっぽけさに何の感慨も抱かない者たちが、今そこにはいた。

他の誰でもない、現在進行形でバルアセーヌ市国の中枢を麻痺させかけているテロ組織〈個人投資家^{エンゼル}〉の構成員だ。

道端に運送業者に扮した大型トラックが停車している。

コンテナ風の荷台に積まれているのは、運送業者の制服に身を包む男二人と、彼らの足元を這う太いケーブル類。

動力源に繋がる配線は、くしゃくしゃに丸まった紙やカラの菓子類、インスタント食品のパッケージを乗り越え、そのまま四脚の白い机の上に伸び、即物的な大きさを持つハードウェアに接続されている。

そして、指を鳴らす者。

「はい、ビンゴ」

コンピュータの前の椅子であぐらをかきつつ、白くて細い十指をキーボードの上で踊らせる女性が、スティック状のクッキーを口元

で弄びながら嬉しそうに言葉を発した。

年齢は二〇代後半といった頃か、シワが寄った白衣の下はタンクトップ一枚にショートパンツのみを着用している。

まるで自身を女性として扱っていない私生活丸出しの格好だ。

けれどボディラインはかなりのもので、そこだけに目の焦点を合わせれば男たちが黙っていないさそうなのだが、長らく切っていないさそうな黒髪を適当に後ろで束ねている彼女の背徳的な出で立ち、それからトラックの荷台に濃い生活臭を漂わせている様子を冷静に見れば、色々と思いとどまることだろう。

泥水のように生温く濁った瞳と、眠たげに半分ほど閉じられた瞼。化粧もしていないパサパサの肌の彼女に呼びかける声が生まれた。『ハッキングに成功したのか、ヘンリエッタ？』

コンピュータのスピーカー部分から、上司の柔和な言葉が流れる。

ここにいる部隊とは別行動で都市部に身を潜めている^{エンセ}個人投資家^ルのボスだ。

組織の上役にヘンリエッタと呼ばれた彼女は、クッキーをポリポリと齧りながら上機嫌にタイピングを続行しつつ、軽い口調で応答する。

「あ、ランジスさん。こちらはヘンリエッタです、えへへ」

『その呼び方は控えてくれ、ヘンリエッタ。我は嫌いなんだ』

「えへへ、すいませんすいません」

『それで？ 首尾はどうだ？』

「ちよーっと、待ってて下さいね。……三、二、一、はい、ビンゴ」

大、中、小、様々な大きさのウィンドウの中にグラフや図形、地図、数字など、何らかの情報を映し出しているディスプレイの一角に、ヘンリエッタが得意げに指を鳴らす共に表示されたのは、一見、意味をなさない文字の羅列。

それはバルアセーヌ市国警備機動隊本部にあるマザーコンピュータ回線へのアクセス許可コードだった。

「余裕でコード取得できたんで、このまま潜り込んでいますねー」

どこまでもお気楽な調子で、へらへらと躊躇いなくエンターキーを押してしまうヘンリエッタ。

お菓子のお砂糖でハードウェアがべとべとに汚れても気にしない。

大罪に手を染めていると自覚しているのかしていないのか、天才ハッカーの他人事のような言動に、スピーカーの向こうから苦笑がもれた。

『汝は芸術家だな。ある分野にかけては他の追隨を許さないほど鬼才ではあるが、他がどうしようもなく墮落している。もはや私生活が崩壊しているからな。トラックの荷台はそんなに居心地が良いのか？』

「お褒めの言葉を授かり光栄ですー。今度、体験同居してみます？病みつきになりますよ」

『機会があれば』

えははー、と笑いながらヘンリエッタは小気味良い音でキーボードを叩く。

そうしている間にも画面の中では目まぐるしい速度で、情報を読めたウィンドウが開いたり閉じたりを繰り返し、ヘンリエッタの脳内で情報が洗われていく。

本部に提出されている機密文書をセキュリティの高い順に漁って取捨する。

文書は暗号化されていたが詰めが甘く、ヘンリエッタの手で意味のある文章に還元された。

そうして何個目かの文書で、ヘンリエッタは目当ての文書を見つけた。

「はい、ビンゴと。……どれどれ。おっ、やっぱりボスの読み通りですよ。倉庫街の一角に対テロ武装の警察機動隊が集まっているようですー。極秘作戦ってやつですねー」

『そうか、ごくろう。それなら予定通り、先手必勝に出るとしよう』
「タスクβですね？」

沈黙が回答だった。

「了解です、タスクβ発令だーい」

コンピュータを操作するヘンリエッタの手から、〈個人投資家^{エンゼル}〉の待機部隊に向けて突撃信号が送られたことによって、数分後、市街地の喧騒から離れた港の倉庫街で、テロリストたちによるオートマチック・ライフルの発砲音が断続的に反響することになる。

バルアセーヌ市国行政庁長官ワルサー氏の息女ステラを誘拐し、犯行声明を出したテロ組織〈個人投資家^{エンゼル}〉に対抗するため、急遽バルアセーヌ市国側が極秘に編成した対テロ武装の警察機動隊が倉庫街を隠れ蓑にして、強襲作戦のブリーフィングを行っている。

という情報を〈個人投資家^{エンゼル}〉の構成員たちの無線機に入った。

ソースは情報収集および分析から命令系統までをこなすハッカーの腕そのもの。

その情報が真実であるかのように、潮風が吹き抜ける港の倉庫街は徹底的に人払いが済まされていた。

そして、〈個人投資家^{エンゼル}〉の天才ハッカーことヘンリエッタから、あらかじめ倉庫街の周囲に待機していた武装部隊に、『タスクβ』の実行信号が送られた。

要するに、この倉庫街に潜む警察機動隊を即時殲滅せよ、という意味だ。

こちらには行政庁長官の息女という人質もある。

国側も下手に手出しはできないのだろう。

民衆の批判など、どの国の政府だって食らいたくないものだ。

だからこそ、極秘に対テロ部隊を編成していたのだ。

もはや愚策としか評価できない。

だからと言って手を緩める必要はない。

一方的に攻めて、一人くらい生け捕りにして、『こいつらは何だ、お前たちの知り合いか』と国側に冷や汗をかかせることもできる。

人質というカードを後ろ盾に、けれど決して油断はすることなく、適度の緊張をもって彼ら〈個人投資家^{エンゼル}〉の武装部隊は倉庫街に侵入した。

彼らも素人ではない。

限られた戦力を有効的に活用できる陣形配置を組み、五人一組になって、合計九つの待機ポイントから突入した。

防弾、防刃、耐熱に優れた迷彩柄の野戦服を着込み、催涙対策のガスマスクを着装しているテロリストたち。

総勢四五名による奇襲だ。

足音を極限まで殺して静寂な倉庫街を縫うように進軍し、標的の姿を捜す。

有利はこちら側にある。

襲う側と襲われる側の違いだ。

そんな思考は慢心ではなく、客観的な考察から導き出したもの。

油断はしない。

全力で叩き潰す。

そんな思惑の結果——中距離から遠距離の獲物を狩り取るには十分な能力を発揮する長銃を握りしめ、敵の寝首を掻く形で作戦を進める彼らの一部は、とある青年の声に意表をつかれることになった。「俺様はつくづく疑問に思うね。何で最近のクソ野郎共は、そろいもそろって銃火器にばっか手エ伸ばしてんだ？　ってよ。まるで皆がそうしてるから自分もそうしとこう、みたいな姿勢が見え隠れして俺様は許せねエわけよ」

トラックはおろか遮蔽物も何もない倉庫街のメインストリート。道幅はおよそ二〇メートルほどで、一面に砂利が敷き詰められている。

両サイドに連なる倉庫はどれもこれも嚴重にシャッターが下りていて、人工物ばかりの空間は不自然な静けさだけが支配していた。

——その青年が堂々と道の真ん中に現れるまでは。

「武器ってのはよ、本当に銃火器が最強なのか？　テメエらは周り

に流されるだけで、思考停止してんじゃねエのか？　もっと他に試さなくていいのか？　疑問に思わなくていいのか？」

誰に話しかけているのか、大袈裟な身振り手振りで舞台劇の一人芝居でもしているみたいに、砂利を踏み締めながら歩く青年。

年齢は二〇代前半か、まだ顔立ちは若く、爽やかな青の髪とだらしなく着崩している海賊めいた灰色の装束が個性を通り越して強烈な異彩を放っている。

実際に彼は元海賊なのだが、テロリストである彼らが知ることはないだろう。

三角形の革帽子にバンダナ。

ウール素材の長衣の下に、リネン素材のストールベスト。

そして、シンプルな無地のVネックロングTシャツを着こんでいる。

腰には牛革のメッシュベルトが巻きつき、ウール素材クロップド丈のサルエルパンツはスエードブーツの内側に入っている。

左手の指には指輪。

右手にはレザーの手袋。

耳にはピアス。

左腕にはブレスレット。

首には革のチョーカーにスカルのシルバークセサリー。

サルエルパンツのポケットからは、ウォレットチェーンが垂れている。

いささか海賊の属性をデフォルメした仮装的服装と、現在進行形でだらだらと吐き出している言葉と、顎周りの無精髭を無視するならば、なかなかの好青年にも見える。

通常ならば、すでに警察機動隊の関係者として、テロリストたちに撃ち殺されてもおかしくない状況の中、灰色装束の海賊風青年は朗々と語る。

「いやいや、別に否定するわけじゃねエんだ。銃にだって良いところはあるさ。ありまくる。ピンからキリだが、飛距離、威力、速度

もハンパじゃねエしな。弾幕張られた日には泣けてくるし、量産品なら比較的安価で手に入るし、引き金を絞るって動作だけで人を殺せたりもすんだからよ。一步間違えてりゃあ、俺様も浮気してたかもしれないねエ」

倉庫の物陰に潜んで様子を窺うテロリストたちは、自身の体にまとわりつく大きな疑問と、一抹の不安を抱く。

テロリストたちに対して自身の存在をアピールするかのよう、ゆっくりと緩慢な動作で、こちらに歩みくる青年は、しかし、なぜ、どうして、まだ撃たれていないのか。

海賊気取りの青年が歩いてきた長い一步道。

その方向は、同胞の作戦ルートに引つかかっているはずなのだ。なのに、

「だがよ、だからってよ、近接武器が銃器に劣るって理屈にはならねエんじゃねエかって、俺様は考察するわけよ」

なのに、なぜ奴は撃たれていない。

まさか、返り討ちにあったとでも言うのか。
有り得ない。

見たところ大した武装をしている様子はない。

先ほどからジャグリングの要領で右手で弄んでいる一本の短剣しか、持っていない。

「そりゃあよ、そいつがテメェらにとってのベストウェポンってことでオーケーなら、俺様だって異論はねエさ。ライフルの扱いに関しては誰にも負けねエってプライドと技術があって、愛情があんなら、俺様風情の男から文句なんか微塵も出ねエわけだ。分かるだろ？
そう、つまり俺様が言いてエことは、シンプルにして一つだけなんだよ」

奇妙な青年は一度立ち止まり、呑気に説法を垂れ流したその口の端を上げて嗤う。

「俺様の嫁こそが最強だ、であろう？」

五人のテロリストは最初、聞き間違いではないかと思って、戸惑

い混じりの視線を周囲に投げた。

青年の言葉を継いだのは、彼自身ではなかったのだ。

妖艶とも表現できる、生々しい女性の声。

しかし――、それは明らかに青年の周辺から発せられた声で、けれどそこには彼一人しか存在しない。

無線機の類ではない。

いくらなんでも違いは分かる。

マスクの索敵センサも異常を示していないことが科学的証拠だ。

気味の悪いことに、今は完全に肉声だった。

「演出に誤魔化されるな。腹話術か何かに決まってる」

五人のうち、リーダー格の男がガスマスク越しに言い切った。

緊張に固まったトーンだったが、この隊を率いている彼が臆し、まごついていては下の者に示しが見つからない。

彼はそのままハンドシグナルで四人の同胞に、射撃の準備をさせる。

極小ボリウムでカウントダウンを口にした。

格好の的になっている無防備な青年に向けて、倉庫の影から一斉に銃口の狙いを照準し、引き金を――

「あがつ」

最後尾から生まれた低く呻くような濁音に、前衛四人の動きが凍りつくように瞬間的に止まり、まずは首だけ振り返った。

単純かつ奇怪な光景に残り四名のテロリストは混乱する。

同胞が一人、そこで白目を剥いて倒れている。

他には誰もいない。

狙撃をされたものかと思ったが、倒れている仲間の体に外傷は見当たらなかった。

「ノープロブレム」

今度は、全員がその場で踵を返したことによって最後尾に位置することになったリーダー格の男の肩口から、ボイスチェンジャーで歪んだ機械的な音声がかかる。

「殺してない。昏倒しているだけ」

顔と体の向きを元に戻すよりも先に、テロリストのリーダーは長銃の引き金を絞った。

炸裂する発砲音。

しかし、振り向いた先で弾丸は見事に空を切り、

「あとで小生が拷問にかけるマテリアルだから」

すでに目の前には誰もおらず、だがリーダー格の男は確実に側頭部に衝撃を受けていた。

何者かは分からないが、伏兵は的確にマスクで覆われていない部分を狙ったのだ。

脳が揺れていると自覚する間もなく、意識の混濁が始まる。

それに伴って足元のバランス感覚が麻痺し、胃液が喉元までせり上がったところで、彼はこと切れたかのように白目を剥いて倒れた。束の間、残り三名のテロリストは何が起きたのか瞬時に把握することができなかった。

最後尾を守っていた仲間が倒れたかと思いきや、今度は先頭のリーダーが独りでに倒れたのだ。

「な、何だ？ 何が起きている？」

「クソったれ！ てめえ、何しやがった！？」

テロリストの一人が完全に冷静さを欠いて物陰から飛び出し、倉庫街の大通りを歩く青年にライフルを向ける。

青年は自分の顔を指差して、

「俺様？ 俺様は何もしてねェよ」

何食わぬ顔でしれっと言う。

「ふざけんな！」

一人で突貫したテロリストは、そのまま焦燥に導かれるように引き金を絞った。

空まで貫く乾いた銃声。

だが、その後に聞こえるべき苦痛の声は耳朵に触れない。

代わりに金属同士がぶつかり合って、火花が散るような甲高い音

が響いた。

「おいおい、射線がバレてちゃ意味ねェだろうが。武器への愛情が足りてねェ証拠だ、クソ馬鹿野郎」

テロリストは我が目を疑った。

灰色装束の海賊風青年は極めて無造作な所作でダガーを横薙ぎに振り、その刃でもって弾丸を弾いた、のだろう。

弾丸は思わぬ方向に逸れ、青年は無傷。

「なっ、はぁ!？」

ガスマスクの下で驚愕に目を剥くテロリストの反応を見て、青年はニヤリと仄暗く笑いかける。

「武器と己を信じて鍛錬を積み、こんなこともできる。慢心は身を滅ぼすぜ。武器を持っただけで強気になるなんぞ、素人だ。プロは武器と共に自身の身体能力を切磋琢磨するもんだ。基本中の基本だろう。」

瞬間、いまだ倉庫の影に潜んでいた同胞二人が、同時に呻き声を発して地面に倒れ伏した。

今度こそ、そこには見知らぬ人影があった。

ダガーで銃撃を防ぐ怪人的な青年と同じく、灰色の装束をまとっている。

ただし、その者は灰色の頭巾をかぶって布を顔まで垂らしているため、顔立ちはベールに包まれている。

年齢も性別も不確かであるため標準に対してどうかは不明だが、テロリストたちや海賊青年よりもいくらか背は低い。

しかも上はビンテージもののスポーツウェアで、下にはスパッツをはいている。

かなりの軽装だ。

ふざけているとしか思えない。

「一体、何なんだよチクショウ!」

恐怖と怒り、焦る気持ちが入り乱れた怒声をガスマスク内から撒き散らしつつ、テロリストは撃つしか選択肢を思い浮かべられなか

った。

なにせ、どうして同胞たちが地面に倒れ伏しているのか理解できていないのだから、対策もろくに練られない。

片や、銃撃の速度を容易くあしらう青年。

片や、未知の技術で同胞を一息に四人も無効化した頭巾野郎。

小刻みに震える銃口の向く先は、それでも青年の胴体に固定されている。

（さ、さっきのは偶然だ。普通に考えてそうだろ。中距離戦でライフが刃物ごときに負けることが、あり得てたまるか）

強張った全身を奮い立たせ、テロリストは引き金にかけた指に力をこめる。

銃から伝わる衝撃を全身で殺し、結果を見守る。

どうか偶然であつてくれと祈るような思いで。

しかし、彼の半信半疑で均衡の安定を保っていた天秤は、やはり青年のダガーにいと簡単に弾かれてしまうことで、一気に傾いてしまう。

マスク下の表情は、畏怖の色に彩られ歪んだ。

すでに頭巾の暗殺者の姿は視界にも意識にも検知されていない。

それからは苦し紛れの、トリガー・ハッピーみたいな安易で、でたらめな発砲が続いた。

撃つ。

弾かれる。

撃つ。

弾かれる。

撃つ。

弾かれる。

装弾数は二〇発。

命中率はゼロ。

火薬庫だけが軽くなっていく。

弾倉はすぐにカラになる。

どう考えてもこの攻防の戦況は、常軌を逸していた。
ショートレンジ

近距離に入り込まれたわけでもない。

こちらの得物が剣や斧といった近接武器ならまだしも、ライフルだ。

リーチが違い過ぎる。

なのに、なぜ自分は追い込まれているのか。

異常なのは、どっちなのだ。

銃を手にしてもなお、ほとんど空手の相手を殺せないで弾薬を無駄に消費している自分の弱さなのか。

それとも、ダガー一本で銃を相手に追い詰めている相手の超絶な技能か。

常識は通用しない。

射程の優位性も、銃撃の速度も威力も全て無為にされている。

(だめだ、ライフルじゃコイツを殺せねえ。クソ、こんなことなら射程が短いのがなんか気にせず、ショットガンを持ってくるんだったッ！！)

しかし、手元がないものに嘆いても仕方ない。

(こうなったら手榴弾で――)

はつきり言って、ここで手榴弾を使用するのは得策ではない。

下手をすれば破片と爆風に自身も巻き込まれ、少なからず負傷する可能性が出てくる。

おまけに敵対者との距離が近過ぎる。

彼の所持する手榴弾の信管は時限式のため、爆破の前に投げ返されるかもしれない。

タイムラグは四秒に設定してある。

二秒の間を置いてから投擲することもできたが、今の彼にその余裕はない。

だから、せめて投げた後に伏せることくらいしかできない。

彼の武装で最も信頼していた得物が、刃渡り三〇センチ程度のダガーにあっさりと破られてしまったのだから。

孤立無援となつてしまった未熟なトリガー・ハッピーは、役立たずのライフルをかなぐり捨てて、ごそごそと野戦服の胸ポケットを漁る。

途端、気楽な調子だった青年の顔色が曇り、まとう空気がガラリと変わった。

海賊の船長を想起する帽子の下、視線は一度、地面へと見限られたテロリストのライフルに注がれ、戻る。

「デメエらよお」

青年が呆れたような口調で溜息をついた次の瞬間、彼はそれまでの緩慢な挙動が嘘のように凄まじく華麗なスタートダッシュを決めた。

いっそう慌てたテロリストは、ポケットから目当ての手榴弾を取り出そうとしたが、所作が噛み合わずに足元へ取りこぼす。

その間隙に突貫するように灰色装束の青年は疾駆した。

風のような勢いでテロリストに肉薄する。

それは、ほとんど一息のゼロ距離。

踏み込み、重心移動、撃ち込みが刹那に行われた。

へ？ と間拔けな声すら出す暇もない。

逆手から順手に持ちかえられた海賊青年の短剣が、ズブリと鋭い角度でテロリストの喉笛に深く突き刺さったからだ。

「やっぱ銃火器ってだけで、そいつを手にしてんだな？ 考えが甘エんだよ」

パサツという音は、数秒前まで青年がいた地面に海賊の船長というキャラクターを想起する帽子が落ちた音。

ドサツ、と崩れ落ちた音は、言うまでもない。

喉の奥から拡散する灼熱。

呼吸がまとまらずに理解し切れないほどの苦痛と、血の味が脳髓をかき乱す。

それが、テロリストの彼が末期に知った最初で最後の感覚であった。

「たく、近頃のテロ野郎共は根性が足りねエなあ」

足元で喘ぎながら息絶えた男の醜い姿など、もはや視界にも入れず青髪の青年――『船長さん』は呟いた。

その手には刃渡り三〇センチ、重量は相場の二倍近くある血みどろのダガー。

刀身は既存のナイフと比べて厚い、両刃の直刀だ。

汚らわしい男の血と脂で愛器の刃が錆びないように、『船長さん』は携帯していた布で丁寧に拭う。

応急処置だ。

あとで砥石できちんと手入れはする。

「貴殿にそれを言われたら、大半の人類はエンド。小生を含めて根性なしになる」

ボイスチェンジャーの機械合声に振り向けば、帽子を差し出す小柄な頭巾がいた。

そうか？ とだけ興味なさそうに素っ気なく返して、『船長さん』はベルトに付属している専用ホルダーにダガーを収める。

フリーになった両手で帽子を受け取り、バンダナの上に載せて具合を調節しつつ、

「ところで、どうやって連中に襲いかかったんだ、『暗殺さん』？」

帽子の位置に納得した『船長さん』は一つ頷いてから、改めて自分より背の低い『暗殺さん』を見返した。

こちらを見上げている頭巾から、変換された機械的な声が答える。「複雑怪奇なことはない。後ろから忍び寄って、一人目の意識を狩る。わざと声をあげさせるのポイント。残り四人の注目が後方に集中するのと入れ替わりに、小生は四人の視界に入らない高所まで移動し、倉庫の壁の出っ張りを使ってななめに駆け上る。音を立てな

いサイレント技術が必須。そうしたら、テロリストたちの動揺が同胞に注がれているうちに、最後尾の背後に無音で回り込んで、脳を揺らしてあげればパーフェクト。あとは同じことをリピート。一匹エスケープしたけど」

「どんな運動神経してんだ。サーカス行けよ。新入りに言うのも何だよ」

「……」

照れているのか、もじもじと俯く『暗殺さん』。

両者の間に少し良い感じのムードが流れようとしていたその時、そこに割って入るように、『船長さん』の腰から、あの艶めかしい女性の声が生まれた。

「おやおや、妾という嫁がいながら逢い引きとはな。もはや、それは逢い引きになっておらぬぞ。密会でも何でもないのだからな。妾の目が黒いうちは――」

「んだよ、シェリル。嫉妬か？　そこが可愛いな、おい。萌えちゃうな。いや大丈夫だって。心配しんな。俺様はシェリル一筋だからよ。浮気なんかしねエよ。帰ったらきちんと研いでやるから、その時は良い声聞かせてくれよ？　もちろん、二人つきりでだ」

『船長さん』は仄かに頬を染めて、腰のホルダーに備えているダガーを見る。

そして、その短剣からも返答の声が生じる。

「か、可愛いとか言うな馬鹿者。妾は別に嫉妬などしておらぬ。そなたの勘違いだ」

「素直じゃないところも、ひっくるめて大好きだ」

「は、恥ずかしいから、人前でそういうのはやめろと言っている」「分かった分かった」

本当は恥ずかしがり屋なところも愛していると言葉にしたかったのだが、恐らくは伝わっているだろうから、妻の名誉のために内心に留めておいた。

怪奇的なカップルがイチャついている間に、『暗殺さん』は平常

運転に戻っていた。

「他のメンツは、残党狩り始めてる。小生と貴殿はどうする？」

「ん、そうか。生け捕りは、まあこいつらで十分か」

『船長さん』は倉庫と倉庫の間で、意識を失っているテロリスト四名をちらりと一瞥した。

「ラジャー。一四番の倉庫に拉致しておく」

「んじゃ、他のテロリスト共は皆殺しで——」

——問題ねエな、と言いかけたところで三時の方角から小規模な爆破音が聞こえた。

「ちよつ、ちよつと銀髪縦ロール！ それ私の得物よ！ 横取りなんてズルいじゃない！ 返しなさいよ！ セっかく一〇人目で切りが良かったのに！」

「あらあら、ごめんあそばせ。下々なオマエがあまりにも鈍臭い動きをしていたものですから、あたくしが代わりに仕留めてあげたんですわよ。感謝こそされど、睨まれる覚えはなくてよ」

「ぐぬぬ、お嬢様気取りの高慢女なんかに下げる頭なんてないわよ！」

「あら、いやだ。身の程知らずですわね。いいこと？ 高貴なるあたくし。卑しい平民の分際をわきまえないオマエ。封建社会において下位階級の平民が上位階級であるあたくしに頭を下げるのは、ごく自然なコミュニケーションなんですよ？ お分かりになって？

図で説明いたしましょうか？」

「いらんわ！ 大体、私たちの組織に上位も下位もないわよ、この封建脳女！」

「あ、でも先ほど低俗なオマエは、下げる頭はない……つまり、『下げるだけの脳みそが足りてない』と自覚してらっしゃった。矛盾してますわね。ま、細かいことは気にしないのが崇高なるあたくしの懐。ほらほら、分裂した死体でよろしければ返却いたしますわよ、

金髪縦ロール。これで低級なオマエが仕留めた得物の数は倍になりますわね。さあ、お取りあそばせ」

「わーい、ほんとだー。ありがとー銀髪縦ロールー。おかげさまで一人になっちゃったー。中途半端な数で気持ちが悪いか、帳尻合わせにお宅の軟弱な体を九等分にするわね」

「下克上？ 野蛮な元空賊は、あたくしのお零れを拾っているのがお似合いですわよ？」

二七番倉庫内で全力で不毛なやりとりをする二人の少女がいた。

金髪を右サイドだけ縦にロールさせている方は、『金髪さん』。シャープな顔立ちにのせる小生意気そうな表情が作用して、ボーイッシュな可愛らしさを生んでいる一七歳前後の少女だ。

灰色の装束はゴシックロリータ風で、かなり露出が多い軽装。

上はパーカーみたいなものだが、胸元までしか丈がなく腹部の白い肌が露出しており、上着の下に何か着ているのかは分からない。

そしてチェック柄のサスペンダーが付属している短パンに、ソックスと編み目のブーツを履いている。

片や銀髪を左サイドだけ縦にロールさせている少女は、『銀髪さん』。

自身を持ち上げる言動と、『金髪さん』を必要以上に見下すお嬢様風を気取るだけあって裏切らず、恐ろしく整った美貌を携えている。

『金髪さん』とは同い年だが、一ミリも形を崩さない『笑顔』が幾分年上に見えた。

彼女が着衣しているのは――豪奢なウェディングドレスだった。

スタイルは、上半身が体に馴染むようにフィットし、ウエストが絞られて腰から裾にかけてパニエによってふんわりとスカートが広がっているプリンセスラインだ。

全体的なシルエットは段重ねのレースが華のように咲いていて、繊細な印象を受ける。

ネックラインはオフショルダーで、さらに花嫁はシルク素材のグ

ローブをしているため、『金髪さん』とは対照的に露出が皆無だ（いわく、これを着ていると変な虫が寄ってこないらしい。当たり前だと思う）。

しかし、もしもそれが純白ドレスだったなら、煌びやか清楚なイメージが加わっただろう。

だが、例によって灰色を基調としている上に、点々と返り血がついているため、あらゆる花嫁要素を台無しにしている。

そして、二人の全体像を何よりも何よりも常識の埒外に置いているのが、彼女たちの線の細い体躯の半分はあろうかという動力武器。『金髪さん』は青いボディの坑道掘削用ドリル。

『銀髪さん』は赤いボディのチェーンソー。

ここが工事現場で、それを握りしめているのが可愛い少女たちでなく、黄色いヘルメットを装備する作業員ならば、それらは特に不思議な道具にはならない。

けれど、誰もいない郊外で、奇妙な二人がこの場にそれを持ち込むだけで、青いドリルと赤いチェーンソーは一瞬で凶器と化す。

事実を証明する状況があった。

つい一分前までは、この場到大勢の人間がいたのだが、一分が経過した今では険悪な二人しか立っていない。

他は全員、血だまりの中に沈んでいる。

少女たちの獰猛な獲物で退場させられた、〈エンゼル個人投資家〉の構成員たちだった。

彼女たちが持つ凶暴な得物は明らかに鮮血を吸っており、実際にその刃がテロリストたちを殲滅したのだ。

「それに、機動性に欠ける武器を愛玩している愚かなオマエが悪いんですのよ？ 獲物を横取りされたくないのですしたら、もう少し早く動ける努力をすることオススメいたしますわ」

チェーンソーお嬢様が銀髪を片手で払い、愛嬌のある笑顔に似合わない毒を吐くと、

「何ですって！ 私のドリルにケチつけるっての！？」

負けず嫌いの金髪ドリル少女が、顔を真っ赤にしながら柳眉を逆立てて食いついた。

見ただけで身が竦む禍々しい武器を持っている、そんなアンバランスな絵の中心に彼女たちはいる。

「愚昧ですよ、金髪縦ロール。武器に罪はなくてよ。お分かりかしら？　むしろ自身の未熟さをあまつさえ武器の責任にしようとし、それを使いこなせていない底辺のオマエが愚か、とあたくしは言及しただけですの。過剰に反応するのは優雅でなくてよ」

「い、言ってくれるじゃない、この切断狂かつ露出狂。私とドリルの有能性を、お宅の肉体で証明してあげましょうか？」

「オホホ、それは興味深いですわ。いい加減、あたくしとしても白黒をつけたかったところ」

『銀髪さん』は天使まがいの笑みを湛え、チェーンソーを低い位置で構えた。

動力源とブレード部分が一体化しているため、重心が手元に集中するのだろう。

赤いボディの側面に設置されているツマミを思いっ切り引く。

動力部から低い駆動音が鳴ると同時、手元のセーフティを解除して回転スイッチのオンを親指で押し込むと、動力を得たブレード状のガイドバーに巡るチェーンの刃が高速回転を始めた。

鋭い刃が回転する音は、威圧感となって耳にする者の精神を蝕む。だが、似た武器を手にする『金髪さん』は、もはや動じない。

彼女の武器は『銀髪さん』のチェーンソーと変わらず、発電機を要する坑道掘削用ドリル。

円錐状の自動回転式兵器は、ドリルの周囲に螺旋状に刃が備わり、突き刺すだけでなく、切削面の外周も利用できるように考えられた武器だ。

バッテリーは、まだまだ残されている。

盲信ではなく、己の武器を実力で信頼している二人の少女が睨み合う。

そして、一二時の方向から聞こえた小規模の爆破音が、痴話喧嘩開始の合い図となった。

宙にわだかまる微量な火薬の臭いに『紳士さん』は、僅かに眉をひそめながら呟く。

「『邪道さん』のそれは相変わらず派手ですね。まさに邪道だ」

一見して人畜無害そうな優男は、およそ二〇代後半辺りの落ち着いた雰囲気醸し出している。

灰色を基調にするパリッとした紳士服と、ハットとステッキというアイテムは、彼のニックネームである『紳士さん』の個性主張を助長していた。

ただし、ステッキの先に付属している三メートルほどの銀鎖は、付着している人の血と相まって、紳士という属性からはかけ離れたものとなっていたが。

「僭越ながら『暗殺さん』の体術や、そちの銀鎖に比べればな。元山賊の名残だよ。だが、見た目の派手さや音なら、『金髪さん』や『銀髪さん』に劣るだろう。しかしながら……」

三メートルほどの金砕棒を片手でスイングする野獣のような巨漢が、野太い声でのっそりと言葉を返した。

背丈と横幅は細身の『紳士さん』と比べて、それぞれ二倍と三倍はある。

首、腕、太ももなど筋肉で覆われた鎧のようだ。

『邪道さん』と呼ばれる彼は剛健な気風を、なぜか神父の格好で固めている。

薄い生地 of 羽衣風の長衣を肩で羽織って、右肩には三メートル近い金砕棒が担がれおり、その重量は五キロ強ほどもあった。

「しかしながら、だ」

ぱたぱたと血を落とす鈍器に洗礼を受けたテロリストたちが、二人の周囲に転がってピクリとも動かない。

そして、彼らのガスマスクは一樣に顔面ごと破碎していた。
生き残りのテロリストは二人。

どちらも圧倒的な力の差を感じているようで、鉛玉を発射するライフルを持っている程度では自信がないらしく、逃げ出す動作に移っていた。

距離は一五メートルも開いている。

「しかしながら、爆薬仕込みの金砕棒は――」

背中を向けて一目散に駆け出す敵に慌てることなく、『邪道さん』は前傾姿勢になった。

そのままクラウチングスタイルで体勢を固定したかと思った束の間、次の瞬間には、もうそこに彼はいなかった。

「ストレス解消にはもってこいだ。なぜなら――」

『紳士さん』の視線が前方に移動した頃には、すでに『邪道さん』の大きな背がテロリストにたち追いつきかけていた。

二〇メートル近く開いていた距離を、数秒の加速で短縮したのである。

ぎょつとした様子で振り返ったテロリストの一人が、慌ててライフルで応戦しようとした。

が、間に合わない。

引き金が絞られる寸前、テロリストのガスマスクに『邪道さん』の金砕棒が思いつ切り叩き込まれた。

完璧なフォームの走行で得た運動エネルギーと、右から左へと斜めに叩き落とすように両手でフルスイングした位置エネルギーの一撃が、もっとも威力の出る打点にて穿たれた。

鈍くて湿った音と、硬い物質が碎ける音が重なる。

顔面を強打されて、呻きながらのけ反ったテロリストに対して、『邪道さん』は容赦しない。

すぐさま右手を離し、左半身側に振り切った金砕棒を左手のみで制御して、打突を打ち込むための初動を整える。

その間、わずか一秒強。

でかい図体と、のろまな口調とは完全乖離した敏捷な動き。

鈍重のイメージを裏切り、彼は所属している組織一、足が速い。

「――爆発はロマンチックだろう？」

そして――本日何度目かの爆破。

金砕棒の先端によるスラストが鮮やかに決まり、テロリストの鳩尾に叩き込まれた直後、熱波と煙、焦げくさい匂いが充満した。

体をくの字に追って数メートルほど地平と平行線に吹き飛んだテロリストは、もう一人のテロリストを巻き込むように突撃して、二人は情けなくもきりもみしながら地面に転がる。

意識を失った方の同胞を乱雑にどかし、最後の一人となったテロリストは尻もちをついたままライフルを構えた。

「この、化け物があああああああ！！」

銃口が火を吹いたけれど、それは『邪道さん』の横にそれた。

流れ弾の行った先は、後方でのんびりとした歩調でこちらを観戦していた『紳士さん』。

ステッキの先に付属している銀の鎖をくるくると回しながら。

「毎度のことですが、『邪道さん』が感じるロマンチックポイントが僕には分かりません」

『紳士さん』は銀色の回転を止めて、鎖の輪に挟まった銃弾を取り除いた。

『紳士さん』は攻守ともに頑丈な金属製の鎖の輪っかで弾丸を止めながら、苦笑気味に言うと、

「うむ、たとえば『金髪さん』はああ見えて、けっこうなコンプレックスの塊だろ？ ロマンチックであると吾輩は思うのだが」

ひっ、と一歩後ろに下がるテロリストの頭に金砕棒を振り降ろし、なんともあっけなく戦果をあげる『邪道さん』。

彼らと敵対して生き残れたテロリストは、全て撃破された。

「彼女の場合、負けず嫌いに拍車がかかってますしね。『銀髪さん』とは犬猿の仲です。もしや、それがロマンチックだど？」

「それもロマンチックである。あの二人は心の底じゃ互いを認め合

っているのだ。……普段は殺し合っているが」

なるほど、と『紳士さん』は一つ頷き、何に対しても好奇心を抱きやすい彼は、話題を掘り下げる。

「では『邪道さん』の目から見て、『船長さん』はどうですか？」

そう訊ねると、『邪道さん』は難しい顔つきをして、テンポの悪い返答をした。

「彼は……まあ、なんだ、奇人変人の中でも群を抜いてるだろうと吾輩は思っている」

「なるほど、シェリルさんとの愛は確かに歪ですよ」

「あの短剣の意思は、半分オカルトに足突っ込んでいる代物なのだろう？」

「ええ、僕も詳しいわけじゃありませんが、『船長さん』のアレは本物でしょうね」

「素材に金属と若い娘の生き血を使用した、曰くつきのダガー。しやべる以外には普通の短剣とスペックは変わらない。しかしながら、そちは、ああいうのは苦手だろう」

バレてましたか、と『紳士さん』はハットの影に苦笑いを隠した。「まあ、何にせよ、あの二人を引き離すのは無理ですよ。恋人同士だし。でも、そこにロマンは感じないんですか？」

「ああ、吾輩は感じない」

きっぱりと頷いた『邪道さん』に、親しみの苦笑を浮かべつつ、「やっぱり、『邪道さん』のロマンチックポイントは理解できませんよ」

「ぬう、やはり理解あるのは新入りの『暗殺さん』だけか」

「得体が知れないところに魅力があるのなら、共感はできますが？」

「正体が男の子かもしれないぬし女の子かもしれないぬ謎に満ちた人物」

「体つきからして女の子だと思いますけどね」

「あの暗殺術もずば抜けておる。あの高性能なボイスチェンジャーは、どこで手にいれたのだろう。吾輩は気になる」

「彼女の実力は本物ですよ。ほら、ここにくる前に片づけた依頼、

あれほとんど『暗殺さん』一人の手柄でしたからね。彼女の實力を確認するため、僕らがほとんど手出ししなかったとは言え、なかなかの腕前でしたよね」

「言われてみれば、その依頼も変な仕事だったな」

「逆に僕たちが受ける仕事でマトモなのを列挙できますかね？」

「そうじゃない。普段と毛色が違う気がしてな」

「全然、守備範囲ですよ。非合法な人体実験を繰り返してる研究施設の襲撃。結局、あそこで何が行われていたのか、僕たちには理解できませんでしたけどね」

「そうであるな」

べらべらと離しながら死体を放置して歩き出す二人だった。

∞ ∞ ∞

彼ら是对テロ警察機動隊として少数精鋭で編成された国外の傭兵だ。

『船長さん』。

『暗殺さん』。

『金髪さん』。

『銀髪さん』。

『紳士さん』。

『邪道さん』。

それぞれが自身の得物を愛する奇人変人の実力者である。

「えへへー。奇襲部隊、全滅しちゃったみたいですよー」

サーバーを掌握しつつ、呑気な声音で報告するヘンリエッタ。対するスピーカーの声も落ち着いている。

『……どうやら、我らはまんまと釣られてしまったようだ』

「どーゆーことですよー？」

『ヘンリエッタの感覚で、ハッキングの難易度はどういうレベルだった？』

「んー、誘導用のデコイもありましたし、けっこうレベルは高かったと思いますよー。まあ市国という規模の水準で鑑みれば、ですけどねー」

『つまりは、汝にとってその程度。マザーコンピュータへの侵入は見越されていたんだろう。ヘンリエッタ、今すぐそこから逃げた方がいい』

ヘンリエッタが小首を傾げた姿が見えたかのように、

『おそらく、そこにくる』

「でも、排除しないでいいんですか？」

『目には目を、齒には齒を、毒には毒をもって制するでしょう。我らのバーサーカーに迎え討たせる』

「もう、バーサーカーはあんまりじゃないですか？ 『レーナさん』だって、一応女の子なのに」

通信を切りつつ、周囲にいる二人の部下にハンドシグナルで、さっさと立ち去る準備を始めるよう命令する。

武装した部下たちは文句一つ唱えず、荷台から下りて黙々と移動の準備を始めた。

トラックの荷台で一人になったヘンリエッタは鼻歌混じりに、「それにしても興味深い闘いになりそうですね。ボスが手塩にかけ

て育てた彼女と、様々な紛争地に顔を出しては暗躍する神出鬼没の荒事専門汎用傭兵部隊。どっちが強いんでしょーねー」

間近に迫る楽しみに心を躍らせる少女のような無邪気さで、ヘンリエッタは独りごとをつらつらと並べる。

しばらく、そうして鼻歌を口ずさんでいたのだが、

「んー？」

何を手間取っているのか、トラックがいつまで経っても発進する気配が訪れない。

大袈裟に首を傾げながら、ヘンリエッタはあぐらを崩して立ち上がり、ふらふらと荷台から下りて部下たちの様子を窺おうと顔を出した。

けれど、そこに部下たちの姿はなく、

「あれ、あなたたちは？」

代わりにそこにいたのは――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6712z/>

【スパイラル・トライアングル】

2011年12月24日00時51分発行